城と史蹟を歩く会　平成１４年後半のスケジュール

第１４回　８月１１日（日曜日）　夏期研修会（資料代２００円＝予告編は発行しません）
１３時３０分～１６時ころ、八幡公民館視聴覚室
①市原を所領とした大名、旗本たち（仮題）　山岸弘明
近世市原の支配と領民の暮らし、所領とした大名、旗本たち。将軍家との血縁で成り上がる蛍大名の陰に廃絶の悲運に涙する旗本たち。地頭たちの栄枯盛衰で江戸時代史を綴る。
②藤田屋のみた幕末（仮題）　竹内　克
竹内講師の先祖は八幡宿の旅籠藤田屋。同家に伝わる旧幕府軍敗残兵遺品や菊間藩仮庁舎時代に拝領した水野家家紋彫刻などを紹介しながら、明治維新史の一側面を見据える。

第１５回　９月８日（日曜日）　古河城と小山城を歩く　（ホリデーパス利用）
往路＝八幡宿７時０７分（京葉快速先頭車両乗車）東京７時５１分着（山手線）上野８時５４分（⑤番線東北本線）小山１０時０８分着。移動＝小山１３時３０分ころ（３駅戻る）古河
復路＝古河１６時１７分、上野１７時１０分着、東京４３分（総武快速）八幡宿１８時４１分
主要コース＝日光街道小山宿、脇本陣、須賀神社、小山評定跡、御成御殿跡、小山城（昼食）、古河宿、諏訪郭、市立歴史博物館（３００円）、古河城址、正定寺
雨天予備日＝９月１４日（土曜日）

第１６回　１０月８日（火曜日）　生実と小弓、２つのおゆみ城を歩く
往路＝八幡宿８時５２分（２駅）蘇我９時０２分着、蘇我駅東入口９時２３分（落井椎名崎行きバス１２分）南生実降車。移動＝南生実１３時１８分（バス３分）御寺前降車
復路＝生実坂下１６時１３分（バス１０分）蘇我、蘇我乗車（２駅）八幡宿１７時ころ着
主要コース＝小弓城外郭、埋蔵文化財センター、本丸跡、大百池公園（昼食）有吉城、生実陣屋外濠、重俊院、陣屋跡、生実神社、大手口跡、城下、陣屋升形
雨天予備日＝１０月１０日（木曜日）

第１７回　１１月４日（月曜振替休日）　佐倉城と城下を歩く
往路＝八幡宿８時１０分、千葉２９分着、３７分（⑦総武本線各駅先頭車両乗車）佐倉５３分着。移動＝田町（バス）新町
復路＝佐倉１７時ころ、千葉駅経由、八幡宿駅１８時ころ着
主要コース＝武家屋敷、成徳書院跡、佐倉城大手門跡、３の丸、２の丸、角馬出、本丸（昼食）搦手の守り、城下町商店街、おはやし館、甚大寺、堀田邸さくら庭園（２００円）
雨天予備日＝１１月９日（土曜日）

第１８回　１２月５日（木曜日）　芝増上寺と泉岳寺周辺を歩く
往路＝八幡宿８時１０分、蘇我８時４１分（④京葉快速先頭車両乗車）東京９時２６分着、（山手線）浜松町１０時ころ着
復路＝泉岳寺１６時ころ（三田線）品川、東京経由、八幡宿１８時ころ着
主要コース＝芝神明社、芝増上寺、東照宮、芝公園（昼食）、薩摩藩邸跡、勝西郷会見の地、水野藩邸跡、旧東海道、高輪大木戸、泉岳寺、細川越中守邸跡
雨天予備日＝１２月１０日（火曜日）

各回とも下見により一部コース内容を変更することがあります。

城と史蹟を歩く会　　市原市八幡北町２－１２－１２－５０１　郵便番号２９０－００６９
（ご案内と問い合わせ）　山岸弘明　電話０４３６－４２－２２３７

１）趣旨＝城と史蹟を楽しみながら歩くこと。目でみるよりはむしろ足で見るものだからです。
２）行動範囲＝東京都内、千葉県内など交通費片道１０００円圏内、ホリデーパス圏内とします。
３）定例会＝毎月１回程度。平日を中心に土、日、祭日も。雨天中止は連絡網で予備日に延期します。
４）資格＝通常程度歩けること。会員は原則として毎回参加、欠席のとき前回受付時申出またはＴＥＬ連絡。無断欠席はやめましょう。
５）会員の種類＝会員、土日会員。会員にならなくても１回だけの参加もできます。
６）入会金＝なし。参加費＝毎回５００円＋１００円（アルバムカラーコピー代）。交通費、入場料などは個人負担、弁当持参。
７）保険はありません。会の運営はボランティアで行なわれています。万一の責任は負えませんので、お互いに交通ルールなどに注意しましょう。
８）会員数＝平成１４年５月現在５９名、毎回４０名以上参加。

以　上

城と史蹟を歩く会　第１４回「夏期研修会」資料１
平成１４年８月１１日（日曜日）　　八幡公民館

徳川政権を支えた市原旗本たちの２７８年

山岸　弘明

①近世市原のあけぼの

２１世紀はＩＴの時代だそうだが、「歴史人間」を自認する筆者にはとてもなじめそうにない。わずか１３０年余りの昔、日本全土を封建領主たちが支配し、五井、八幡宿の房総往還を参勤の大名行列が行き来していたことに思いをはせるとその変革ぶりは「夢のまた夢」、ＩＴ変革の比ではないだろう。

江戸後期、市原の総米収高はおよそ５万５千石であったが、その支配構成は徳川直参旗本領が６５％を占め、ついで大名領２８％、代官が支配した幕府直轄領は４％、与力同心給地が２％、寺社領１％の順であった。その多くが旗本大名領や幕府の天領で、房総地区が徳川家の勢力基盤として、徳川幕府を支えた歴史的背景を物語っている。市原を領有した大名、旗本家は筆者の調べで１８９家、総数は千人あまりにも達した。その多くは見返されることもなく歴史の彼方に消え去っている。許された紙面は僅かだが、ＩＴの時代を遡って、徳川政権を支えた市原の大名、旗本たちの２７８年を駆け下ることにしたい。

天正１８年、豊臣秀吉の小田原征伐の論功行賞で徳川家康に関東６か国が与えられたが、このとき上総には里見氏の対抗勢力として本多忠勝が大多喜１０万石、大須賀忠政が久留里３万石、内藤家長が佐貫２万石に封ぜられている。このほか「天正分限帳」による万石取りは井伊直政、榊原康政、大久保忠世ら合計３９名に上るが、当時の徳川家は豊臣家の一大名にすぎずその家臣を大名と呼べるかどうか議論が分かれるところだろう。

さて、関東入府時の市原の領国支配は細分化されたが資料も少なく判然としていない。大多喜の忠勝領は夷隅郡を中心に九十九里沿岸部におよぶが市原南部もその所領とされ、南西部一帯の村々は久留里大須賀領に組み入れられた。そして近書「市原市史資料集」の山本家文書は近世初頭史に重要な手掛かりを与えている。寛延２年「閏井土村万覚帳」で、ここには文禄年間から慶長ころまで閏井戸村が本多佐渡守所領であったと記している。本多正信領は通説で甘縄１万石とされるが、前出分限帳や「寛政重修諸家譜」などの幕府正史も上総八幡、上野八幡、庁南などの異説も併記して明確でなかった。資料は市原説を裏付ける貴重なもので今後の研究解明が期待されよう。

市原に所領をもった３人は徳川創設期の武将として著名だ。忠勝は井伊、榊原、酒井とならぶ徳川四天王。小田原征伐、関が原の合戦などで活躍、文字通り槍一筋で徳川幕府の創設に尽くした。後期は本多正信ら官僚派と対立、政治の舞台から遠ざけられるが、そのライバル正信の所領も市原にあったことになる。関が原合戦後の家康最側近。智謀と行政手腕が抜きん出、二元政治時代の実務推進者となるが、その子正純が謀叛の疑いで取り潰しの悲運を味わう。大須賀忠政は四天王榊原康政の長男だが庶子のため大須賀家に養子、２代目を継いだ康勝が亡くなったので家康の命で榊原家復帰、大須賀家は絶家となった。

万石以下では五井村など５千石の松平家信、八幡村など５千石の永井直勝、山口村など２千石坪内雄得、新巻村など２千石水野義忠、高倉村など８百石戸田直頼などなど。慶長５年関が原の合戦勝利、８年徳川幕府成立で、家信が佐倉４万石、直勝も古河７万石で大名となるなど多くが加増、栄進となった。しかし一方、五井村など５百石の芦屋家は２代重勝が江戸城西の丸大手門前で同僚と刃傷事件を起こして殺害されている。ある者は加増を繰り返して子々孫々におよび、ある者は改易劇に涙した。市原近世２７８年の歴史は悲喜模様を折りなしながら、こうして幕を開いた。

②将軍家との縁に連なって出世街道を歩む

徳川幕府の基盤は２代将軍秀忠、３代将軍家光の治世で確立されるが、市原は引き続く旗本大名領で、一部は幕閣として頭角を現していく。関が原の戦功で市原から古河７万石に栄進した永井直勝の子尚政も秀忠の近習から老中へ。父とは別に八幡村、海士村など２万石を獲得して閏井戸に陣屋を開いた。寛永３年父遺領とあわせて８万９千石となり古河城に入る。徳川忠長改易を沙汰し、京都守護の任にあたった。

堀　直之は江戸町奉行で９千石、次の直景が１万石にすすんで八幡宿駅近くに陣屋を置く。土塁、空堀、角欠けといった遺構がわずかに残っている。家康に重用された板倉勝重の子は２代続いて老中、重宣の時、加茂地区など２万石に。通称高滝藩だが陣屋はなかった。秀忠将軍の下、本多正純、板倉勝重らに次ぐ重臣で勘定行政を掌握した伊丹勝長は加増を重ねて甲斐の徳美で１万２千石に進み、次の勝長が所領を姉が崎村、土宇村などに移した。勘定奉行で佐渡奉行兼務。寛文２年、江戸役宅での吟味中、被告の凶刃に倒れた。

４代将軍家綱時代にかけて、幕閣の加増地に組み込まれたりもした。家光側近の一人で川越８万石酒井忠勝は老中から大老、慶安４年家光の遺言によって家綱の補佐役に。朝廷対策、大名統制に手腕を発揮、江戸城を完成させ、鎖国政策を推進した。寛永時代佐是地区７か村を加増された。病弱の家綱に代わって専権を振るい、江戸城大手門前下馬札前の上屋敷に因んだ下馬将軍の名で恐れられた酒井忠清もまた大老時代の延宝８年から６代６９年間寛延２年まで、取り潰しとした久留里土屋家の旧領２万石を加増、加茂地区、五井地区など２３か村を加えた前橋藩は１５万石となった。

将軍家一門からも新しい領主を迎えた。姉が崎村は家康の次男結城秀康のそのまた次男松平忠昌が１万石で領有、のち越前宗家３代福井５０万石を継承する。３男松平直政も２万石で転じて松江１８万石に落ち着く。後期だが、９代将軍家重の２男徳川重好が御三卿１０万石清水家を興したとき宮原村、惣社村などを所領。廃人同様の９代将軍家重の予備血統だが市原領は当主不在による中断を除く宝暦１２年から弘化３年まで続いた。

将軍家との血縁に連なって出世街道を歩んだ旗本もあった。慶安３年から国吉村、馬立村などを知行所とした三好政盛は織田、徳川連合軍に敗れた戦国大名浅井氏の一族。長政を父に信長の妹市を母に生まれ、数奇の運命を辿った淀、初、江（ごう）３姉妹とオイメイの間柄。元和元年、大阪夏の陣で大阪城は落城、豊臣秀頼と淀は城と運命を共にしたが、このとき政盛の祖父で長政の兄明政の娘がムコ養子政高との一粒種を抱いて千姫の脱出に従った。のち梅津を名乗って血縁の江に仕え、その子直政は秀忠の小姓に取り立てられた。政盛のとき秀忠、江の娘で朝幕融合政策のため後水尾天皇の女御として入内した東福院和子のご機嫌伺いに参内、家禄を２千石として市原に所領を獲得した。

徳川家康の側室勝は太田道懽の後胤。家康１１男頼房の養母となり家康の命で実兄重正の次男資宗を養子に迎えた。資宗の活躍は勝への信頼と無縁ではない。六人衆（若年寄）に進んで徳川家臣団の紳士録「寛永諸家系図伝」を編集、山川１万５千石、西尾３万５千石に栄進、子孫は掛川５万石で明治維新を迎えた。同じく家康の側室阿茶局の子守世も秀忠の小姓とされ旗本３千石に。後出、５代将軍綱吉の側室伝、１１代将軍家斉側室楽、美代などの実家も娘のエニシにあやかって市原に采地を置いている。江戸はじめの市原は徳川家臣団の躍進がめだった時代でもあった。

③華開く元禄の市原

元禄時代。１６８８年から１７０３年。戦がなくなって久しく、武士にも町人にも農民にももはや平和は当然のことと考えられていた。江戸は急激に発展し、当時の人口はすでに１００万人を数えたという。消費は拡大し、貨幣経済がすすんだ。家康の築いた幕府財政も５代将軍綱吉の消費で早くも窮乏を極めることとなった。

綱吉といえば世界に類をみない悪法「生類哀れみの令」の「犬公方」で知られる。その実務推進者でもあった柳沢吉保領が市原にあった。元禄元年から７年まで閏井戸村など。本来たしなめるべき立場にありながら自らの出世に利用したとの評価の反面、経済に精通した出色の政治家との見方もある。綱吉の小姓、側用人から甲府１５万石大老にまで上りつめた。綱吉の側近荻原重秀も天羽田新田を知行する。勘定奉行、佐渡支配を兼任。金銀貨幣の改鋳案を建議した。改鋳は貨幣の質を落として通貨量を増加させるもので、その差益は４百万両にも達した。この結果幕府財政は一気に好転した。その後も長崎貿易の拡大、全国の酒店への運上金で増収をはかり、旗本の地方直しで支出を削減をめざすが、中間搾取も取り沙汰された。将軍が６代家宣、７代家継に代わった正徳４年、新井白石の弾劾で勘定奉行を罷免、市原領はわずか９年間で没収された。

元禄時代といえば赤穂浪士の討ち入りを忘れることはできない。大名監察を任とする大目付仙石久尚領も磯谷村に。赤穂浪士を影ながら支援、自宅に自首した４６士に４家お預けという幕府処分を言い渡した。旧主の仇を討ち取った大石内蔵助らに切腹の命が下ったのが元禄１６年、元禄最後の年であった。元禄文化は泰平ムードの中に都市の消費生活を向上させたがインフレや道義の頽廃もめだち米作経済を基盤とする封建制度を揺さぶっていた。人々は悪政に泣き富士山の噴火におののいた。

紀伊家から８代将軍に入った吉宗は幕府財政立て直しのため享保の改革に取り組む。バブル崩壊後の経済再建は支出の歯止めと農民への厳しい年貢取立であった。改革の手始めは綱紀粛清を兼ねた代官の不正追求から。幕府はこれまでの税収滞納はすべて代官の責任として弁償を求めた。次々と不正が暴かれ廃絶などの重い処分が課せられた。その数は全代官の半数にも達したともいう。１５０俵御家人で代々勘定方と代官を勤めた窪田貞房は死去した父の滞納返済を求められ家督相続が認められない。享保１５年晴れて完済、改めて１５０石の旗本に取り立てられて今津朝山村を知行とした。五井村など２千石の神尾守親、分家千石守尹、５百石守宣の３家は無尽講が咎められる。人の金銭をかすめ取りしは武士の所業にあらずとして改易。阿茶局以来の名家が潰れた。

「暴れん坊将軍」の名脇役、側御用取次の有馬氏倫と名奉行大岡忠相もドラマに欠かせない。氏倫は老中と将軍の中間に位置して御用の取次を行なうが首席老中松平乗邑とともに享保の改革を実務推進した。享保１１年１万石に栄進、五井村などを所領して５代氏よしがＪＲ五井駅に陣屋を構えた。忠相は南町奉

行として物価、経済政策に取り組み、町火消しを設置、貧困者救済のため小石川療養所を作ったりもした。江戸期を代表する名奉行として有名だが「大岡政談」の多くは忠相と関係のない中国の故事やほかの奉行の裁判記録を転用したものだという。大岡家は忠相の旗本３千９百石享保１０年から西大平１万石での明治維新まで７人の藩主が不入斗村、島野村などを所領とした。享保の改革の成果は一時的に幕府基盤を好転させたが長くは続かない。

④頽廃と改革、揺らぐ封建制度

９代将軍家重は先代吉宗の長男だが、生来の病弱に加えて言語障害がひどく誰にも聞き取ることができない。ただ一人家重の心情を理解したのが麻生原村、石神村などを領有、側用人で安房勝浦１万５千石から武蔵岩槻２万石に転じた大岡忠光だった。忠光は政治の表舞台に現れることなくひたすら老中らを補佐した。１０代将軍家慶の時代は田沼意次に代表される側用人政治となる。八幡村、海保村の松本秀持は田沼の腹心として活躍した。百俵という低い身分から才能を認められて抜擢されると、勘定吟味役、勘定奉行に進んで家禄を５百石とした。マイナイ批判の一方で積極的な経済政策を進めたが田沼が失脚すると旧悪が暴かれて１５０石に戻された。

娘を将軍の側室に上げて出世した蛍旗本を②稿で書いた。泰平の世、立身出世の早道とあって旗本たちは自らの娘や養女を大奥に送り込んだ。５代将軍綱吉の側室で世子徳松の生母となった楽は最下層の黒鍬者小屋権兵衛の娘、あやかった一族が栄進する。伝の妹の婚家白須政休も５百石を与えられ、子孫が家治の側衆、家斉の側御用取次を勤めて５千石に伸ばした。市原の采地は寺谷村、五所村。

１１代将軍家斉には１室２２妾が知られる。世子家慶の生母は楽。旗本５百石押田敏勝の娘で弟勝長に５百石が加増され西の丸新番頭格小姓、今津朝山村を。頽廃政治が極まった家斉の大御所時代、元凶の一人とされる中野清武は絶世の美女美代を養女として大奥に送り込むとはたせるかな家斉の寵愛を独占して溶姫と末姫を産む。清武も３百俵から２千石に加増された。悪賢い清武は大名や旗本の任官の口利きを行ないワイロをもって訪れる客が絶えない。しかし、家斉が亡くなって１２代将軍を継承した家慶と首席老中の松平定信が寛政の改革を断行、清武は減封、美代も大芝居を打った家斉のニセ遺言事件がバレて大奥を追われた。中野家は天王河原村、松ケ島村などを知行した。千６百石の水野忠篤も妹蝶のエニシで栄進していく。取り巻きの１人として最大８千石まで伸ばしたが改革で千５百石にダウン。万田野村など５か村は７年間に終わった。

姉が崎村、椎津村の安房北条１万２千石水野忠てると古都部村、佐瀬村など旗本３千石の林忠英も家斉の側近の一人。忠てるは西の丸老中に進んで３千石を加増、文政１０年居所を椎津に移して鶴牧藩を名乗った。忠英も若年寄へ。度々の加増で１万８千石に成り上がる。木更津の貝淵に陣屋を置いたが寛政の改革の洗礼を受けて１万石を子孫に繋いだ。文政６年松平外記事件が起こった。席順が低いが文武に優れた外記が追鳥狩の拍子木役に選ばれる。公然と白眼視する上司、同僚のねたみに耐えかね５人を死傷させて自害。調査の結果、綱紀の乱れや武道の衰退がわかり関係者４０名が厳罰に処された。瀬又村の池田新之助も９百石を５百石に削られ、病気を理由に小普請に下がった。

将軍は１３代家定に変わる。生来病弱で政務はおぼつかない。香場村、高田村を知行とした２千石の本郷泰固にもチャンスが巡ってくる。家定を補佐して１万石の大名に。しかし、新たに大老に就任した井伊直弼が反対派を一掃、いわゆる安政の大獄がはじまり泰固も５千石に降格された。嘉永６年ペリーに率いられたアメリカ艦隊が浦賀に来航して開国を迫る。安政５年直弼は諸外国と通商条約に調印、尊譲派を弾圧して独裁体制をしくがこれに対する反発も強まり、万延元年桜田門外で横死、白昼幕府の最高責任者が暗殺されるなどまったく考えられなかったことで幕府の権威は一気に失墜していった。

⑤旗本支配と領民の暮らし

江戸時代、市原は将軍の膝元ではあったが村々は将軍蔵入地、大名旗本領などに分かれた。蔵入地は御料、天領、代官支配所ともいい勘定奉行配下の代官が支配、大名旗本領は何藩領、何某領分、何某知行所、下級役人に集団で与えられた給地は何組同心給地、社寺は何寺領と呼ばれて領主が異なったのである。市原の村数は幕末慶応４年の調べで１８５か村あったが、五井村２，４３６石、姉ケ崎村１，６５４石といった大村から根向村３５石の小村まで規模もまちまち、その多くは複数の大名、旗本領の入り組んだ相給であった。八幡村１，４０３石の場合、岩本内膳正、佐野藤三郎、永井愛之助など旗本７人に代官支配所、八満宮領を加えた９給にもおよんだのである。

相給の村では知行所別に名主、組頭、百姓代が置かれ五人組が編成された。名主ら村役人は領民の代表ではあったが為政者が任命した中間管理者。その主任務は年貢取立てで皆済までの全責任を負った。相給では共用経費の他知行所との調整、水田への水引きや道普請、草刈りや祭礼といった村の行事や作業も簡単ではない。江戸後期、関八州の村々に無法者が横行した。悪いことをしても隣給や他村に移ってしまえばそれまで。村は５郷、２５郷組合（改革組合）にまとまって共同戦線をはった。領民たちを苦しめた一つに夫役の助郷があった。大名、旗本が公用で通過するとき継立の人足を動員したが、大規模な時、当事村だけでは対応できず周辺の村々にも助郷、大助郷が命じられた。こうした通達も組合村を通じて行なわ

れ領民の負担となったのである。

旗本たちは当初、知行所に陣屋を構えたが、寛永２年家光の旗本江戸引上げとその後の所領細分化、分散で土地との結び付きが薄れてくる。はじめこそ知行所百姓の宿泊や江戸見物などの便宜を図ったりもしたが後代単なる収奪者に変わる。年貢は５公５民、４公６民といわれたが知行所によってまちまち。畑や家屋敷もたんぼに換算され、山や原野、川、海、副業なども税の対象となった。冠婚葬祭、焼失した家屋の再建、任官祝いはもちろん、前借りや調達金、手元不如意とする生活費までが強要された。米１俵は本来３斗５升だが、延米、口米、こぼれ米などの名目で４斗になった。百姓は重税のため手元に残ったわずかばかりの米を売って現金にしたので米も食べられない。「水飲み百姓」が土地をもたない小作人の代名詞になった。五人組にも数えられず水や水のように薄いかゆ、雑穀を食べたのが起こりだという。いみじくも家康の「百姓は生きぬよう、死なぬように」とした政治姿勢が引き継がれていることがわかる。

高額な税金は支配側の一方的な収奪で、旗本たちが領主としての責務を果たしたともいえない。水田の水源確保も領民たちの問題、水争いなどの出入りや新田開発、産業振興などに力した様子も窺うことはできない。百姓たちの不満は時に百姓一揆、村方騒動という形で現れたが、裁判官も収奪者、百姓側が勝利することはなく、せいぜい中間管理者の更迭や処分に終っている。首謀者は処刑され後に不信感だけが残ったという例も少なくはなかった。

両者は相反する利害関係にあったが、比較的温暖な気候風土に領民も温厚という房総の土地柄にも恵まれたのだろうか、大きな天災、飢饉、騒動もない良好な関係が続いたともいえる。そこには長年にわたった年貢徴収や儀礼的行為を通じて培われた譜代意識と強い結びつきを感ぜずにはいられない。市原の封建領主支配は領民たちの犠牲の上に徳川支配２７８年、明治維新におよぶのであった。

⑥幕府崩壊とその後の旗本たち

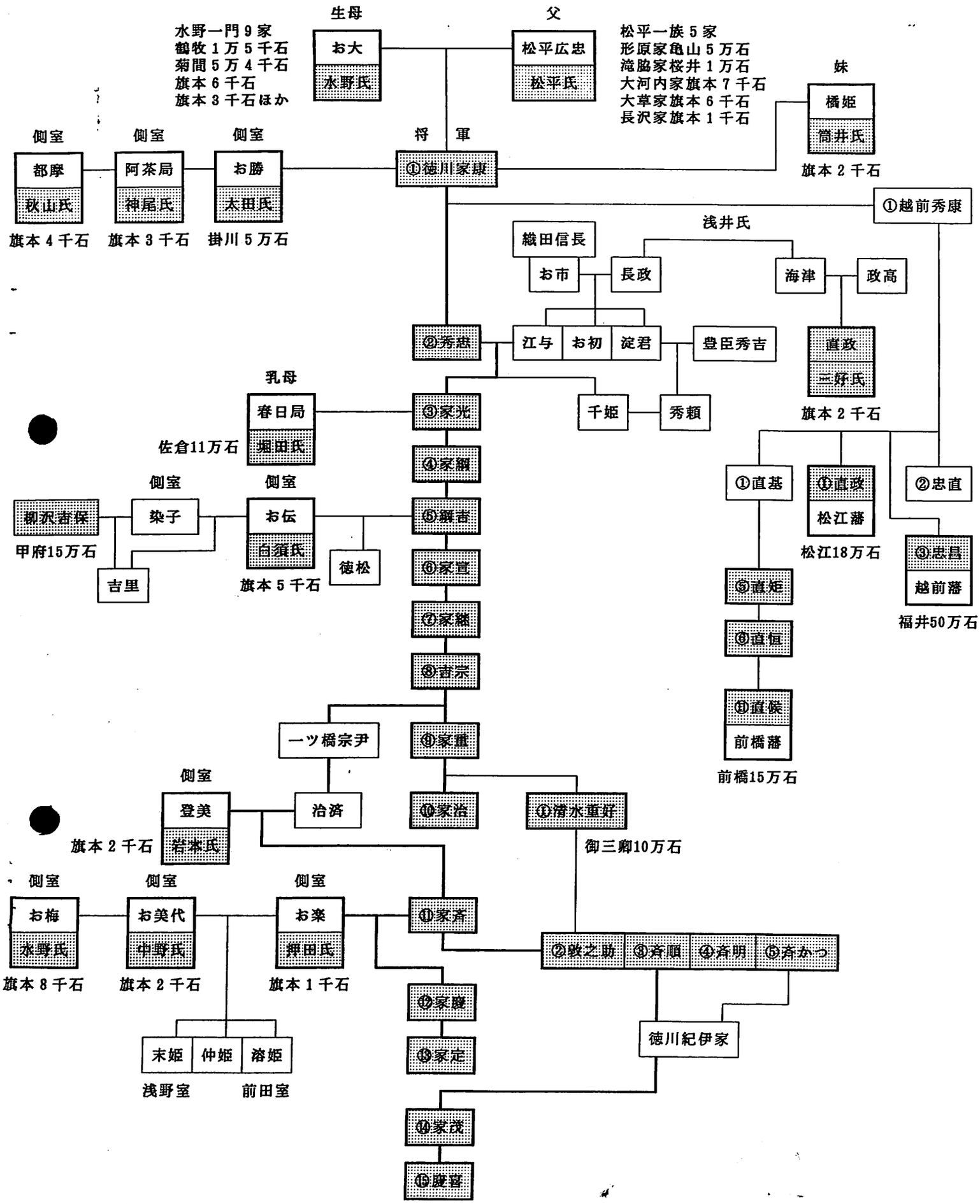
１４代将軍には紀伊から家茂が就任、皇女和宮の降嫁で一時、公武合体の機運が高まるが長くは続かない。家茂は慶応２年第２次長州征伐の最中、大阪城で亡くなり、最後の切札として１５代将軍を慶喜が継承する。内憂外患の幕府は将軍以下主だった首脳を京大阪に集結する異常体制が続いた。山口村など千９百石の部屋住み塚原昌義が慶喜にしたがった。慶喜は最後の将軍として幕政を改革、人材の登用を図ったがその１人が昌義だった。大目付、勘定奉行、外国総奉行、若年寄並を歴任、外交責任者としてフランスのロッシュ公使らとの交流も深めた。慶応３年慶喜は大政を奉還するが引き続いての政権維持をうかがう。翌４年１月鳥羽伏見の戦い勃発。昌義は老中格の大多喜２万石藩主松平正質を補佐する副将として幕府軍を指揮する。幕府軍１万５千に対する官軍８千、数では優るが兵器の差が勝敗を分ける。幕府軍は大敗、慶喜は軍船で大阪から江戸へ逃げ帰った。昌義も江戸に戻るが問責されて罷免、逼塞。慶喜は主戦派を退け、勝　海舟ら穏健派に徳川家の存続を委ねて謹慎の道を選ぶことになる。昌義は脱藩、新政府の追討令も受けたが消息は判らなかったらしい。死地を求めた維新の戦いで戦死したのであろうか。

江戸城決戦から無血開城へ。混乱の中に市原の旗本たちもいた。相川村、榎狭村などの三島政明は家族を市原の采地に疎開、自ら幕府の抜刀隊に所属したが、開城後は慶喜にならって自宅に謹慎した。過激旗本の多くは上野彰義隊や房総に挙兵した義軍などに馳せさんじる。維新時不入斗村など５千石の小笠原石見守は歩兵頭並、天野民七郎は歩兵指図役頭取、富永斧太郎は陸軍所に籍を置く。上司歩兵奉行大鳥圭介は江戸開城のとき、正規軍５百名を率いて江戸を退去しており行動を共にした可能性もある。維新の戦いに進路を誤った領主がいた。宮原村、松崎村など２０か村を領有した木更津請西１万石の林　忠崇は藩士７０名を率いて挙兵、各地を転戦するが戦い利あらず降服、藩は取り潰しとなった。

明治元年徳川宗家を継承した田安徳川家達が静岡７０万石に転封、しかし、その所領は１０分の１にすぎない。徳川家は旗本たちに無禄での静岡随臣か自立かの選択を求める。無禄は生活の保証もない文字通り無収入を意味する。蓄えのない旗本の多くは帰農や商人など自立の道を選ぶ。三島政明、押田真臣も旧領の縁故を頼って市原に帰農するが農業の仕事も簡単ではない。再び主家を追って帰参が許されたが新知行は３人扶持であった。静岡徳川家の各種資料から市原の旗本たちを探したが大作村、八幡村など２千石の河野通和が一時藩重役の中老にあったほか天野民七郎は沼津勤番組、頭並、戸田復太郎２等勤番、三島政明勤番組支配などが散見できたにすぎない。

明治４年廃藩置県。新しい日本誕生の影に職を追われた旗本たちに再び試練が待ち受けた。軍人、教師、役人、商人、農業などなど。自立をめざした人たちの多くは急な転職に戸惑い失敗に終わっている。旗本たちのその後を確認できるのはひと握りだという。市原の旗本たちの多くもようとして消息が知れない。能満釈蔵院に朝岡信守が、神崎共同墓地に鈴木伊兵衛が訪れる人もなくひっそりと眠っている。墓は明治５年と１１年の没年を刻む。２人は旧領を頼った市原で第２の人生を成功することなく終わった。変革の時代を乗り切ることのできなかった旗本の痛々しい最後ではあったが、旧領主たちを温かく迎えた領民たちの心根がなぜかほのぼのささえただよわせてもいる。市原の近世２７８年を支配した旗本たち。その栄枯盛衰は日本の歴史そのものでもあった。（詳細を「市原の大名旗本家資料事典」に取りまとめました。ハイライトの本稿は「市原市文化財研究会々報」に連載中のものです）

徳川将軍家と市原の大名旗本家相関図



市原の大名旗本家総覧　家名（石高）期間、歴代当主＝領名。プロフィル

青山大蔵少輔家（掛川３万３千石）寛永元年～10年①幸成＝姉ケ崎村。幼ない家光への諫言が過ぎて改易となった忠俊の４男。家光の老中で尼崎５万石へ。膳所５万石藩祖。
秋山修理亮家（旗本４千石→４千７00石）寛永10年～元禄11年②正重、正俊、正輔＝市原郡のうち。家康側室お都摩の実家。昌秀が千石をえ、次の正重が大目付で４千石とした。
浅井半兵衛家（旗本５00石）寛永２年～慶応４年①元成、元詮、元智、元学、元近、元義、半兵衛、半兵衛、鉄次郎＝磯谷村。近江浅井氏の庶流、元成が同心百人を付属された。
朝岡久兵衛家（旗本千７00石→２千石→千５00石）元和ころ～天和３年②泰勝、国孝、直国＝能満、荻作、松崎村。泰勝が秀忠の金銀奉行となるが、直国が綱吉の勘気にふれて改易。
朝岡八左衛門家（旗本５00石）慶安３年～慶応４年①八左衛門、重救、朝喬、知明、都安、定増、弘道、太三郎、新兵衛、興偵、栄太郎、信守＝能満、荻作村。久兵衛家から分知。
朝比奈勘右衛門家（旗本千４00石→千百石）元和元年～慶応４年②良明、良豊、良邦、良長、良直、良高、良つぐ、良寿、良休、良知＝平田村。宗利が取り立てられ良明のとき加増。
朝比奈新五郎家（旗本２00石→５50石）天正？～慶応４年①正吉、正重、正照、正武、正幸、正多、正純、正長、三郎兵衛、しょう三郎、平五郎＝荻作村。正吉が関東入府に従う。
芦屋善三家（旗本５00石→６00石）天正19年～慶長12年①忠知、重勝＝五井村。小弓公方、里見氏旧臣。江戸城西の丸大手門前で同僚と口論、被殺廃絶。
阿部因幡守家（佐貫１万６千石）享保９年～明治４年。②正鎮、正興、正賀、正実、正簡、正あき、正身、正恒＝閏井戸、青柳、磯谷、不入斗、佐瀬、村上、町田、八幡、松ケ島村。福山阿部藩分家。岩槻９万石老中重次の２男正春が分封。８代が明治維新まで。
天野佐左衛門家（旗本２千百石→千８00石）天正20年～明治４年①雄得、雄則、雄重、雄正、雄良、雄好、雄年、雄行、民七郎、雄峰、民七郎＝駒込、中野村。家康の小姓から栄進、大坂の陣で先陣を争う。
有馬兵庫頭家（五井１万石）享保11年～天保11年④氏倫、氏久、氏恒、氏房、氏よし、氏保、久保、氏貞、氏郁＝五井、岩崎新田、草刈、西広、村上、寺谷、五所、出津、上高根村。久留米有馬藩分家。紀伊頼宣に付けられ、氏倫が吉宗に従って側御用取次、享保の改革を補佐した。享保11年西条から五井に居所を移して五井藩が成立。氏郁のとき吹上に転封。
粟生新右衛門家（旗本千５00石）天正18年～しばらく①新右衛門＝青柳村。初期の大番頭。絶家か。
安藤伊賀守家（旗本３千石→４千６00石）寛永12年～享保11年①重元、重常、重武＝姉ケ崎、馬立村。安藤常磐平藩の分家。重武が宗家の養子に迎えられて絶家。
安藤伝十郎家（旗本千７00石→３千石）元和元年～慶応４年①定智、定勝、定行、愛定、定厚、定意、増五郎、裕次郎、伝九郎＝金剛地村。磐城平安藤藩の流れ。定行、愛定が側衆で家禄を伸ばす。
池田吉左衛門家（旗本９00石→５00石）寛永10年～慶応４年②長好、長艶、長強、正長、長俊、長高、長置、政宣、長恭、市之丞、新之助、松之助＝瀬又村。政長が千石を興し、子孫が分知を除く９00石を継承するが新之助は松平外記事件に連座して５00石に減封。
石谷左近将監家（旗本千５00石→２千５00石）元和２年～慶応４年①貞清、武清、栄清、真清、澄清、因清、直清、あつ清、鉄之丞＝金剛地村。貞清は島原の乱鎮圧の副使、のち名江戸町奉行に。式清が２千５00石とし、最後の鉄之丞は静岡で中老に。
石野筑前守家（旗本千百石）享保14年～慶応４年②範種、範至、範尭、則存、三次郎、則常＝上高根村。家康に仕えた氏置の分家。範種が勘定奉行、幕末の則常が軍艦奉行、外国奉行を歴任。
石丸数馬家（旗本２千石）元禄10年～慶応４年⑤定賢、定枝、定峯、定てる、定静、貞太郎、虎次郎、しょう太郎、しょう太郎＝小佐貫、飯給村。定政が戦功で千２00石、定次が大阪町奉行で２千石に。
石丸源之助家（旗本２50石）元禄８年～慶応４年①定親、定矩、定広、吉左衛門、左京、鹿之助、清次郎＝小佐貫、北崎。数馬家から分知。
石原織部家（旗本２19石）享保ころ～慶応４年織部、順之助＝上高根村。寛政譜などになく詳細は不詳。
板倉石見守家（坂木５万石）天和元年～３年③重種＝大和田、平野、万田野、大戸村。家康の重臣勝重の直系。重矩、重種も老中だが後継騒動で失脚、岩槻６万石を奪われ坂木に蟄居。
板倉越中守家（高滝２万石）天和３年～元禄12年①重宣、重高＝同上。板倉家の御家騒動は両家並立で決着。旧領を重宣が継承するが16年で庭瀬に移封。通称高滝藩だが市原に陣屋はない。
伊丹播磨守家（徳美１万石）慶安３年以前～元禄11年②勝長、勝政、勝守＝姉ケ崎、島野、二日市場、天羽新田、神代、土宇、石川、宿、高坂、市場、堀越、原田、安須、安久谷、江子田、腰巻、大西、上高根村。康直が初期の勘定行政を掌握、勝長も勘定奉行で吟味中被告の凶刃に倒れ、勝守が乱心自殺改易。
伊丹駿河守家（旗本３千石）承応２年～慶応４年①勝重、勝友、勝房、勝ゆき、勝従、勝晁、駒次郎、勝善＝播磨守家後半13村、真福寺、真ケ谷、奥野、島田、水沢村。播磨守家から分知。
市岡多左衛門家（旗本７00石）寛永ころ～慶応４年②定次、定政、宗栓、宗継、正利、正宗、美喬、美孝、正有、正寿、正次郎＝大桶、吉沢、宮原村。大坂の陣、秀忠御霊屋造営奉行で７00石。子孫は両番格に。
市岡五左衛門家（旗本３00石）宝永５年～６年①正利＝宮原村。多左衛門家から分知。兄の急死で復帰。
稲垣若狭守家（旗本６千石→定府１万３千石）元和元年～元禄11年①重大、重定＝山口村。鳥羽稲垣３万石分家。重大が家光に近侍して６千石。綱吉の信任を得た重定が側衆、若年寄で山上１万３千石に。
稲富宮内家（旗本７50石）①重次、重吉、重宣、直てる、直騎、直容、直福、直賢、旧兵衛、久兵衛＝佐瀬、天王河原、馬立村。砲術の名手稲富氏の一族。当初は鉄砲のこと、後代は大番、小納戸を勤めた。

稲葉越中守家（館山１万石）③正明、正武、正盛、正巳、正善＝平蔵村。戦国大名稲葉一鉄の流れ。春日局の子正勝が淀10万石となり、正則のとき３男正員に３千石を分知。正明が家治の側衆で１万石となり、正武が館山に陣屋。最後の正巳は若年寄、海軍総裁を勤め、維新の時恭順。
井上河内守家（鶴舞６万石）明治元年～４年⑩正直＝石川村など市原郡１08か村２万８千石。明治元年徳川家達の静岡移封にともなう浜松からの転封。譜代重臣の家柄で正直も老中を２度。国入り後鶴舞に城郭建築をはじめ、工事半ばで入城するが完成することなく廃藩置県に。
井上筑後守家（高岡１万石）元和４年～慶応４年①政重、政清、政蔽、政鄰、正森、正国、正紀、正滝、正域、正和、正順＝犬成、小田部、大作、喜多、葉地、奈良、郡本、加茂、藤井、門前、西野谷、根田、風戸、山小川村。鶴舞井上家の分家。政重が秀忠、家光に仕え、島原の乱平定とその後のキリシタン取締りで１万３千石に栄進。政清、政蔽の相続で分知、１万石が明治維新まで。
井上源蔵家（旗本千石）万治３年～慶応４年①政則、政蔽、正強、正納、正休、正みつ、正喜、源蔵、源蔵＝藤井、門前、西野谷村。高岡井上家の分家。政蔽は宗家を養子相続、子孫は両番格。
井上主水家（旗本千５00石）延宝３年～慶応４年①政式、正よし、正在、正賢、正方、図書＝根田村。高岡井上家の分家。２代政清の３男から。代々小姓組など。
揖斐半右衛門家（旗本２50石→６50石）慶長７年～慶応４年①政吉、政軌、政与、政朝、政秀、政敬、政芳、半右衛門、金之助、駒次郎＝白塚、柏原、天王河原、野毛村。大番で２00石、後代家禄を順増。
岩手富士左衛門家（旗本６50石）元禄14年～慶応４年③信吉、信上、門尚、信方、信安、信知、一太郎、□五郎＝米原村。信吉が御所造営奉行、美濃代官で６50石を。
岩本内膳正家（旗本２千石）天明７年～慶応４年③正利、正倫、正脩、正遠、内膳正＝八幡、海保村。代々紀伊家に仕え吉宗にしたがう。正利の娘登美が一ツ橋治済の側室となり長男家斉が将軍職を継承。
上田万次郎家（旗本５00石→７00石）寛永10年～慶応４年③元勝、元隆、元休、元知、元均、元高、元武、元当、元順、兵左衛門、弾正、□助＝白塚、柏原村。関が原合戦で２10石をえ、順増して７00石に。
植村土佐守家（９千石→勝浦１万石）寛永10年～宝暦元年②泰勝、泰朝、忠朝、正朝、恒朝＝麻生原、石神、戸面、黒川、月出村。代々松平、徳川家に仕えて関東入府のとき３千石、泰勝が９千石、忠勝のとき万石となるが、恒朝が分家千吉が刺殺されたとき存命と虚偽の届出をしたことがばれて改易。
大岡出雲守家（岩槻２万石→２万３千石）宝暦元年～明治４年③忠光、忠喜、忠要、忠烈、忠正、忠固、忠のり、忠貫＝麻生原、戸面、月出村。西大平大岡家の同系。３00石の小身旗本に生まれた忠光が家重の側用人に。将軍は言語障害が激しくだれもが意味不明。忠光は心情を読み取って補佐。
大岡越前守家（西大平１万石）享保10年～慶応４年③忠相、忠宣、忠恒、忠与、忠移、忠愛、忠敬＝不入、島野、宮原村。譜代の名門大岡氏の流れ。忠相が吉宗に認められて江戸南町奉行にすすみ、物価、経済問題や江戸治安を確立。享保の改革を推進、寺社奉行で１万石に。
大河原源五右衛門家（旗本５00石）元和２年～慶応４年③正良、有興、有直、有固、有政、源五右衛門、鉱太郎＝高倉村。大坂の陣戦功で３00石、後りん米を改め５00石が確定。
大久保伊豆守家（八幡１万石）貞享元年～元禄10年②忠高＝八幡、引田村。小田原大久保家の分家。家光、家綱、綱吉に仕え、側衆で采地とりん米を合わせて１万石。八幡宿旧仲町に陣屋が置かれたともされるが確証はない。次の常春が老中で烏山３万石、子孫は世襲して明治維新に。
大河内平五郎家（旗本千２00石）享保10年ころ～慶応４年④政能、政与、政寿、彦四郎、彦四郎、絹之助＝滝の口村。家康の目付を勤めた正勝が２千石をえ、途中５00石と３00石を分知した。
大沢弥三郎家（旗本５00石）天保10年～慶応４年⑦直行、三七郎、乙次郎＝五井村。綱吉に仕えた豊昌が御家人となり、直行が右筆組頭で５00石に。
大須賀出羽守家（久留里３万石）天正18年～慶長６年②忠政。市原郡のうち。榊原康政の庶子に生まれ大須賀家に養子。久留里３万石、横須賀５万５千石に進むが、榊原家に嗣子なく家康の命で復帰、絶家。
太田助之丞家（旗本５00石）元禄10年～慶応４年①資春、資世、制資、美資、資久、□負＝市原郡のうち、中高根村。小田原北条氏の旧臣。滅亡後家康に仕え代々大番を。
太田備中守家（山川１万５千石）慶長15年～寛永15年②資宗＝市原郡のうち。太田道懽の後胤。家康の側室勝は水戸頼房の養母に。兄の２男資宗が勝の養子となり若年寄に累進。掛川５万３千石藩祖。
太田又右衛門家（旗本４00石）寛永10年～慶応４年①正成、正信、正実、正純、正さき、正幸、猪十郎、鶴之丞＝佐瀬村。家康の大番を勤めた正直の２男正成も４00石で別家を。
大橋五左衛門家（旗本２千百石）寛永16年～宝暦８年②親善、親祥、親明、親義＝宮原、柳原、神代、西野、小折、町田村。親善が千代姫用人、親義も勘定奉行に進むが領民騒動の対応不良として改易。
小笠原石見守家（旗本５千５00石～５千石）享保10年～慶応４年⑤政登、政方、政久、政恒、長次郎、順三郎、中務＝不入斗村。紀伊家に付けられたが政登が吉宗にしたがって側衆。分知分除き後代に。
岡部丹波守家（旗本４千石→４千５00石）寛永19年～慶応４年①与賢、勝政、盛明、盛清、経盛、盛真、盛美、美勝、盛勝、勘解由、熊之丞＝中、佐瀬村。岸和田岡部藩分家。与賢が４千石、勝政が千石加増。
岡村備後守家（旗本５00石）文政２年～慶応４年⑤直恒、弥右衛門＝海保村。紀伊家に仕え吉保にしたがって後代５00石に加増。直恒が道中奉行、清水家家老、弥右衛門は槍奉行を。
荻原近江守家（旗本３千７00石）宝永２年～正徳４年①重秀＝姉ケ崎、天羽田新田。２百俵御家人に生まれた重秀が綱吉と柳沢吉保の信任をえて勘定奉行兼佐渡奉行に。金銀貨幣の改鋳、長崎貿易、酒造家への運上金などで幕府財政を改革するが、新井白石の弾劾で罷免。
小倉孫左衛門家（旗本６20石）慶長以前～慶応４年①吉次、吉政、正信、隆政、正英、正栄、隆亮、正とう、鈴之進、孫左衛門、源六郎＝下矢田、吉沢、不入、小佐貫村。良明が家康に仕え隆政が加増。

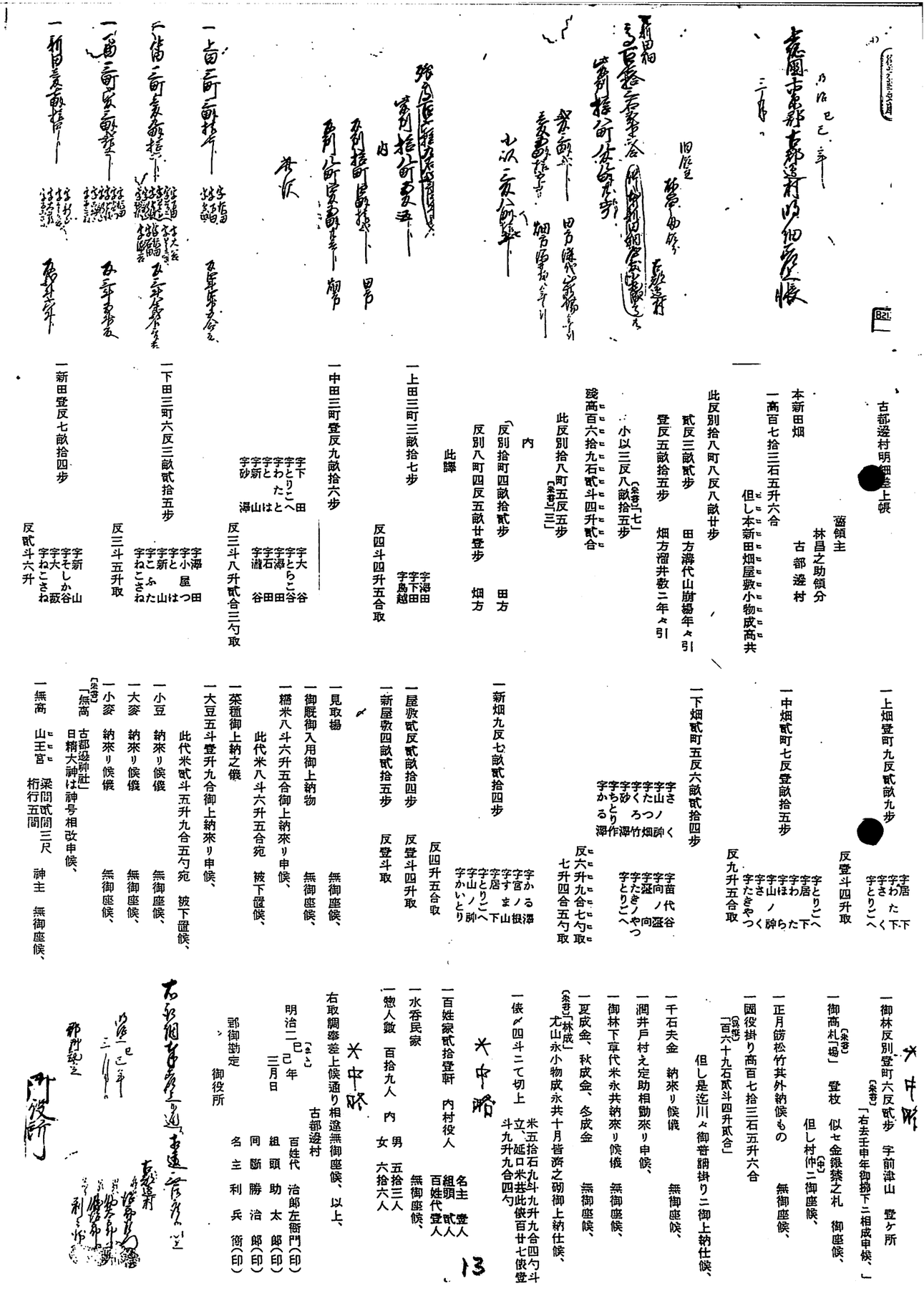
小倉伊右衛門家（旗本２00石）享保10年～慶応４年①正敦、正路、正方、正稲、十兵衛＝不入、小佐貫村。孫左衛門家の分家。
小栗九郎右衛門家（旗本５00石→千２00石）元和２年～慶応４年①久勝、久玄、久弘、久倫、久貞、久徴、久明、久脩、九郎右衛門＝浅井小向、川在、大坪、片又木村。久勝が５百石、久玄のとき千２00石に。
小栗十左衛門家（旗本２80石）寛永２年ころ～慶応４年②正次、正盛、盛次、直正、直盛、直秀、直綱、直政、直経、熊之助、徳太郎＝惣社村。秀忠の大番を勤めた正次が２80石を。
押田丹波守家（旗本千石）文化５年～慶応４年③勝長、勝延、勝休、真臣＝今津朝山村。千葉、北条氏の旧臣。家康に与して２千２00石をえた直勝の分家。勝久が５00石を分知。勝長の妹楽が家斉の側室で家慶を生んだので千石に加増。
小田切美作守家（旗本千６30石→２千９30石→３千５00石）寛永11年？～慶応４年②須尚、直利、直広、直刻、直基、直年、直照、直恭、直道＝佐瀬村。武田氏の旧臣。滅亡後家康の配下で１50石、須尚が禁裏付、尚利は大坂町奉行、大目付、直年も江戸北町奉行で加増。
筧新太郎家（旗本千石→千５00石）寛永４年～慶応４年①正成、正真、重昌、正尹、正逸、正知、正春、国太郎＝岩、白塚、柏原、中、下矢田、野毛村。家康の旗奉行重成の孫。大坂の陣で千石に。
加藤吉左衛門家（旗本石高未詳）寛永10年ころ～承応元年。某＝五井村。寛政譜の吉左衛門と若干の年代ずれがあり未詳。
加藤助右衛門家（旗本千２00石→千７00石）元和７年～慶応４年②正信、正元、正頭、正泰、正臣、正賢、正脩、一学、正行、正重＝葉地村。代々松平、徳川家に仕え、正信が鉄砲頭で千２00石、次の正元も先鉄砲頭千７00石が確定。正脩と正行が伯耆守に叙任、使番、駿府町奉行、一ツ橋家老を。
金田忽八郎家（旗本千５00石）寛永10年～慶応４年①正辰、正親、正在、正次、正紀、正のり、正応、正巧、忽八郎、はつ之助＝山田橋村。木更津金田の千葉氏旧臣。正辰が５00石をえ、綱吉の館林家老に転出したので正親が継承。館林の子孫も３千石、７00石、３00石の３家が明治維新に。
川口久助家（旗本２千７00石）天明２年～慶応４年⑦恒久、恒ただ、加工児郎＝上高根、武士、馬立、君塚、廿五里村。豊臣秀吉時代くつ掛１万３千石を領有した宗勝の子孫。関が原の合戦で西軍についたが２千５00石で存続が叶う。宗恒のとき江戸北町奉行を勤めて加増。
河野権右衛門家（旗本千５00石→２千２00石）寛永２年～慶応４年①通重、通成、通護、通長、通孝、通成、通開、通訓、通和＝大作、中野、八幡村。武田家の旧臣。関が原の合戦で槍奉行を勤めた盛政の養子通重が独立。通成のとき分知、長崎奉行、槍奉行で２千２00石を確定。
神尾刑部少輔家（旗本３千０10石→２千７10石→２千２10石）元和元年～享保２年②守世、守勝、守好、守親＝町田、総社、松ケ島、五井、村上、廿五里村。加茂神職の家系。忠重の妻が夫の死後、家康の側室阿茶の局に。家康の信任厚く大坂冬の陣和議、秀忠娘和子の後水尾天皇への入内に付き添う。実子守世が３千石。守親のとき無尽講が武士の所業に非ずとして改易。
神尾豊前守家（旗本千石）寛永10年～享保２年①守重、守正、守勝、守尹＝青柳村。刑部少輔家の分家。享保２年本家とともに改易。
神尾五左衛門家（旗本３00石）正保元年ころ～貞享３年①守俊、次郎吉＝市原郡のうち。同。無嗣廃絶。
神尾外記家（旗本５00石）元禄15年～享保２年①守宣＝市原郡のうち。同。廃絶。
久世大和守家（定府４万石）慶安元年～寛文９年①広之＝椎津、菊間、君塚、奉免、片又木、池和田、上高根、下高根、風戸、不入斗村。旗本久世広宣の３男。側衆から若年寄、老中に栄進、関宿５万石に。
朽木和泉守家（旗本６千石）寛文９年～元禄11年①則綱＝不入斗、片又木村。福知山朽木家の分家。稙綱の２男に生まれ千石を分知。綱吉の子徳松のもり役で６千石をえるが徳松は早世。
窪田三郎七家（旗本１50石）享保15年～慶応４年⑤貞房、忠房、房昌、与一郎。代々御家人で代官を勤めたが吉宗に認められて旗本に。
黒田大和守家（久留里３万石）寛保２年～明治４年②直純、直亨、直英、直温、直方、直候、直静、直和、直養＝田淵、月崎、徳氏、柿木台、大久保、国本、飯給、日竹、折津、柳川、石塚、菅野、山崎、芋原、根向村。直邦が綱吉の将軍就任に従う。小姓を振り出しに沼田３万石。直純が久留里城を再築、移封。
小出越中守家（旗本５千石→４千石）寛永12年～寛保３年①尹忠、尹重、尹利、尹当、銀次郎＝海保、今津朝山、野毛、畑木、立野村。陶器小出家の分家。尹忠が５千石をえるが銀次郎に子がなく無嗣廃絶。
小出善左衛門家（旗本５00石）寛文５年～慶応４年①貞則、尹一、尹寧、尹充、尹信、尹方、錠太郎＝海保、野毛、立野、今津朝山村。越中守家の分家
小出壱岐守家（旗本５00石）寛文５年～天和２年①尹与＝畑木、海保、今津朝山村。同。御家人に。
小宮山金次郎家（旗本８50石）天保14年～慶応４年⑨金次郎、内膳＝古敷谷村。大番。
近藤源左衛門家（旗本５00石）元禄10年～慶応４年①用貞、用載、用応、用致、用容、岩次郎、隼之助＝平野、永吉、本郷、宮原、不入、北崎、中高根村。旗本近藤用清家の分家。用貞が綱吉の納戸頭に。
酒井壱岐守家（旗本５千石）元禄11年～慶応４年③忠与、忠位、忠候、忠厚、忠順、忠幸、主殿頭、内蔵助＝大戸、新井、野毛、勝間、古敷谷村。譜代の名門雅楽助正親分家の分家。２千石から５千石に。
酒井和泉守家（旗本２千３00石）元禄10年～慶応４年③忠穏、忠意、忠祇、忠貞、兵庫助、励吉＝菊間、本郷、市原、岩崎、二日市場、奉免、川在、島野、山口、引田、神代村。壱岐守家と同系。千石を分知。
酒井雅楽頭家（前橋15万石）延宝８年～寛延元年④忠清、忠挙、忠相、親愛、親本、親恭＝田淵、月崎、徳氏、柿木台、大久保、国本、飯給、日竹、折津、柳川、石塚、菅野、山崎、芋原、根向、八幡、君塚、廿五里、海保、村上、町田、天王河原、今津朝山村。雅楽頭家の直系。代々譜代重臣の家柄。忠清は病身の家綱を補佐して専権を振るい下馬将軍と恐れられた。改易の久留里土屋２万石を加増。

酒井熊太郎家（旗本石高不詳）文禄４年～慶長７年①某＝松ケ島村。寛政譜などになく未詳。
酒井讃岐守家（川越10万石）寛永元年～11年②忠勝＝佐是領７か村、島野、神代村。雅楽助系。川越酒井忠利の長男に生まれ家光の信頼をえて老中、幕政確立に手腕を発揮。小浜酒井藩祖。
榊原安芸守家（旗本千５00石）宝永２年～慶応４年④忠知、忠久、忠清、忠常、主計、主計、岩士郎＝椎津、玉前、松ケ島、武士、磯ケ谷村。正成が関が原の合戦で千５00石。分知残りを子孫に繋いだ。
坂部左太夫家（旗本８00石）宝永はじめ～慶応４年④弘之、種之、明之、直之、善次郎、貞之丞＝上高根、小谷田、古敷谷村。勝之が家康に仕え、弘之は綱吉の将軍職就任にしたがう。明之が堺奉行、持筒頭に。
桜井市右衛門家（旗本３00石）慶長13年～慶応４年②信利、信義、信乗、信秋、信総、信方、伝次郎、六十郎。関東入府にしたがった３00石を明治維新に。
佐々権兵衛家（旗本千２50石）寛永10年～延宝５年②長次、隆直＝菊間村。佐々木盛綱の子孫という。長成が豊臣秀吉から家康に与し、長次も戦功で加増するが、隆直のとき同僚といさかい被殺改易。
佐々源左衛門家（旗本２00石→３00石）延宝５年～慶応４年①良政、政倫、政応、正重、直知、延正、源左衛門、主計＝菊間村。権兵衛家から分知。成倫が加増。
佐藤十兵衛家（旗本石高不詳）享保ころ～慶応４年。十兵衛、釣三郎＝上高根村。確認できず不詳。
佐野九右衛門家（旗本２50石）宝永２年～慶応４年③政国、政長、政信、政房、九右衛門、九右衛門、藤三郎＝八幡村。家康に仕えた正重が２50石をえ、甲斐の采地を市原に移した。
柴山文平家（久留米藩士）明治元年～２年。典＝旧代官支配、旗本領、請西林藩所領のすべて。新政府軍監。房総知県事として上総、安房国の旧旗本領を統括、当初、八幡宿に仮役所をおくが所在は未詳。菊間水野、鶴舞井上藩の転封で宮谷県権知事に。
白須甲斐守家（旗本５千石）天保10年～慶応４年⑥政徳、政はる＝寺谷、五所村。政休の妻が綱吉の側室伝の姉妹という縁で５00石をえ、政賢が側衆、政徳が側御用取次で５千石に。
杉浦彦左衛門家（旗本５20石→８20石）寛永10年～慶応４年②親勝、親則、貞宣、貞隣、貞のぶ、親あき彦左衛門、与一郎、弥一郎＝菊間、永吉、西野、町田、柳原村。和田義盛の後胤で代々松平、徳川家に仕える。親勝が新知をえ、親則のとき８20石が確定。
杉浦忠左衛門家（旗本８00石）元和５年～享保10年①親俊、近成、親茂、親相、親愛＝市原軍のうち、不入村。彦左衛門家の分家。代々大番を勤めたが親愛が采地をりん米に移され御家人に。
鈴木伊兵衛家（旗本５00石→７00石）寛永９年ころ～慶応４年①重辰、重昌、重喜、直武、英政、善政、伊兵衛、伊兵衛＝神崎、櫃狭、久々津、小草畑村。代々松平、徳川家に仕え、重三が大番で２00石をえたが長男重辰を伴って出家、後家光に召し返されて５00石、直武のとき７00石に。
鈴木九太夫家（旗本４50石）寛永10年～慶応４年②重長、正当、従正、影正、正国、正時、正徳＝久々津、中高根、大坪村。伊兵衛家と同根。重三親子が出家したとき２00石を相続、重長が加増。
鈴木四郎三郎家（旗本２00石→千９00石→２千４00石）元和ころ～慶応４年①重成、重俊、直澄、直秀、直善、直賢、直美、直容、重列、勝三郎、数馬＝市原郡のうち、青柳村。重成が秀忠に属して２00石、重俊が甲府綱重守役、書院番頭で加増、直澄も家宣嫡子家千代守役で２千４00石に伸ばす。
鈴木徳之進家（旗本２30石？）宝暦ころ？～慶応４年。四郎次、半兵衛、徳之進＝池和田村。未詳。
仙石伯耆守家（旗本２千石）享保９年～慶応４年①久尚、久近、久峯、久貞、久大、治兵衛＝磯谷、村上村。出水仙石家分家の分家。久尚が大目付に進み吉良邸に討ち入りした赤穂浪士の幕府窓口に。子孫は丹波守が多く側衆、書院番頭を歴任。
曽我丹波守家（旗本３千石→２千５00石→２千石）寛永11年ころ～享保２年②古祐、近祐、仲祐、長祐＝町田村。豊臣家をへて家康に仕え関が原の戦いで千石。古祐は大坂町奉行で３千石、分知で２千石に。
曽根源左衛門家（旗本３千石→２千５00石）寛永18年～慶応４年②吉次、吉勝、喜次、長之、長友、長員次武、次孝、次徳、鋭之助＝山木、勝間、白塚、中、村上村。武田氏の一族。吉次が勘定総奉行で３千石をえ、後代加増分知で２千５00石が確定。
高井作左衛門家（旗本７20石→千石）慶長５年～慶応４年①直清、清正、友清、清方、端清、清矩、清冬、忠篤、忠郷、国尋、久之丞＝山田村。家康の伊賀越えや伏見籠城を助けた直清が７20石、友清が伸ばす。
高田庄右衛門（旗本７00石→千石）元和元年～慶応４年②安政、政信、政矩、政孝、政意、政武、兵庫、斧次郎、虎之助、籾次郎＝国吉村。直政が家康に仕え、安政と槍奉行を勤めた政孝が加増。
高林与五右衛門家（旗本２00石）天正18年～元和３年①昌重＝市原郡のうち、山口村？。武田氏旧臣。関東打ち入りに従う。子孫は千石ほか４家に分かれるが１家除き廃絶。
高林与五右衛門家（旗本６00石）寛永ころ～慶応４年①正成、昌近、昌豊、昌みつ、昌すえ、富三郎、文次郎、富三郎＝山口村。上の与五右衛門家分家。代々両番格。
建部伝右衛門家（旗本８20石）慶長元年～慶応４年①昌興、直昌、昌孝、昌信、昌幸、行昌、昌□、源四郎、伝右衛門、伝内、伝内＝山田、外部田村。代々能書の家柄。家康の右筆昌興が家を興し両番格。
多田三八郎家（旗本５00石→３00石）寛永10年～慶応４年①正長、正次、正豊、正秀、正峰、三八、三八＝山倉村。武田旧臣。忠輝に付けられ改易後秀忠から５00石を。後代分知して３00石に。
多田新蔵家（旗本２00石→３00石）寛文２年～慶応４年①正信、正清、正倫、正憲、正徳、左衛門＝山倉村。三八郎家分家。５00石の山倉村を２分。正清が納戸番組頭で増やす。
田辺清右衛門家（旗本１80石→２50石）寛永はじめ～慶応４年①安直、良栄、良龍、種応、信政、種茂、良親、良興、政芳、清三郎＝池和田村。武田氏旧臣。安直が蔵奉行、漆銅奉行を勤め、良栄のとき３00石に伸ばすが不正があったとして２50石が家禄として確定。
秩父彦兵衛家（旗本２00石）寛永19年ころ～慶応４年①重能、重富、忠高、忠明、忠清、忠春、忠量、彦

中根式部家（旗本６千石）文政ころ～慶応４年⑪正一、正聖、錬三郎。正成が秀忠の小姓番頭から累進して５千石、正勝も加増で６千石が確定。
中野播磨守家（旗本５00石）嘉永４年～慶応４年③清賢＝天王河原、松ケ島、村上村＝３00俵御家人の清武が養女美代が家斉の側室として寵愛を受け２千石となるが、天保の改革で５百石にダウン。
永見甲斐守家（旗本３千石）元禄14年ころ～慶応４年④重直、為位、為章、為好、為貞、為糾、為儔、釜五郎、貞之丞＝岩野沢、高倉村。勝定が家康に仕えて２千石、大坂奉行を勤めた重直が加増。
中山勘解由家（旗本３千５00石→３千石）寛永９年～慶応４年①照守、直定、直守、直房、直正、直看、直秀、直明、直寛、直隆、直有、直植＝番場、高田、瀬又村。北条氏の重臣で八王子城で討死にした家範の直系。大坂の役戦功で３千石、直守は火盗改めで千石を加増するが分知で３千石に定まる。
夏目藤右衛門家（旗本千２00石→９00石）寛文10年～慶応４年②信里、信方、信尹、保信、信卿、信行、□吉、藤右衛門、右近＝奉免村。代々松平家に仕え、家康の身代わり死した吉忠の子孫。
南条小太夫家（旗本５00石）宝永元年～慶応４年③隆屋、隆峰、隆安、隆尚、大次郎、太兵衛＝五所、椎津村。関が原の合戦で滅亡した南条氏の一族。大番が多い。
馬場杢助家（旗本２10石）宝永３年～慶応４年④信明、信安、信栄、庄左衛門、惣三郎、竜太郎＝上高根村。武田氏の重臣馬場信濃守の流れ。
春日猪之助家（旗本６00石）慶長２年～慶応４年①吉次、直次、直住、直高、直重、直応、直義、助太郎、猪之助、与八郎＝板倉、奈良村。渋川二郎の後胤。吉次が小田原征伐にしたがって６00石を。
林肥後守家（旗本２00石→貝淵１万８千石→請西１万石）天正ころ？～慶応４年①忠政、吉忠、忠勝、忠隆、忠和、忠勝、忠久、忠篤、忠英、忠旭、忠交、忠崇＝古都部、佐瀬、荻作、永吉、天王河原、松崎、畑木、飯沼、白塚、柏原、宮原、不入、惣社、野毛、馬立、古敷谷、町田、村上、八幡、小折村。忠政が家康の小姓で２00石、吉忠が大坂の陣に討死、首級は市原の百姓が持ち帰った。以後順増、忠隆が側衆で千８00石、忠和が町奉行で３千石に伸ばす。忠英は家斉の側近となり１万８千石若年寄で貝淵に陣屋を開くが天保の改革で粛清され１万石に。最後の忠崇は明治維新の戦いで反官軍の兵を挙げるが降服、領地没収、のち義弟忠弘に家名再興が許され３00石、男爵。
布施出雲守家（旗本７00石）元禄11年～慶応４年③正房、正隆、正久、正世、正孝、隼太郎、藤兵衛、邦太郎＝大和田村。正森が家康に仕えて１80石、正房が金奉行、先鉄砲頭で７00石に。
堀田相模守家（佐倉11万石）延享３年～宝暦13年⑤正亮、正順＝不入、下矢田、惣社、今津朝山、馬立、勝間、池和田、神代村。春日局血縁。大老正俊の直系。老中首座として家重を補佐。加増地。
堀式部少輔家（旗本９千５00石→刈谷、八幡１万石）寛永10年～元禄11年①直之、直景、直良、直さだ＝平蔵、八幡、米原、小草畑村。豊臣秀吉の重臣堀秀政の分家。直之は町奉行、直景が万石をえて刈谷藩、直良のとき市原の八幡宿に移し椎谷転封まで。
本郷勝右衛門家（旗本２千石→川成島１万石→旗本５千石）寛永10年～慶応４年①勝吉、泰勝、久泰、政泰、知泰、三泰、泰行、泰固、泰清＝番場、高田、瀬又村。戦国大名の直系。家康に仕え、大坂の陣の戦功で２千石。泰固が病弱の家定の側御用取次で１万石をえるが井伊直弼の大老就任で旗本に降格。
本多佐渡守家（八幡１万石？）天正ころ～慶長ころ③正信＝閏井戸村ほか。譜代重臣の家柄。家康の最側近、２元政治時代駿府から指示。大久保忠隣失脚の画策者だが子の忠純も釣天井事件で廃絶。
本多中務大輔家（大多喜10万石）天正18年～慶長６年②忠勝＝月崎村など南部地区。徳川四天王の一人で小田原征伐の上総、下総攻略で戦功、10万石に。後期は本多正信ら官僚派と対立、表舞台から遠のく。
曲淵信濃守家（旗本２千石）宝永２年～正徳４年④重羽＝今津朝山村。武田氏支流。家康に仕え、軌隆のとき綱吉の鶴姫用人で２千石、重羽は信濃守、越前守で小普請奉行、作事奉行を歴任。
松平伊予守家（姉ケ崎１万石）慶長12年～元和元年①忠昌＝姉ケ崎、海保村。家康２男秀康の２男。大坂冬、夏に出陣。通称姉ケ崎藩だが定府で市原に陣屋はなかった。兄忠直を継いで福井50万石に。
松平石見守家（旗本６千石）元和２年～５年①康安＝海保村。松平一族で通称大草家。家康に仕えて６千石。子孫は３家に分かれたがいずれも無嗣などで絶える。
松平紀伊守家（旗本５千石）天正18年～慶長６年？①家信＝五井、惣社村。形原家。家康に近侍、関東入府で五井、陣屋地は大宮神社？。関が原後高槻２万石、佐倉４万石、子孫は亀山５万石で明治維新。
松平甚兵衛家（旗本千２00石）元禄14年～慶応４年。信言、信興、信強、信広、信敏＝永吉、古敷谷村。長沢家。忠輝の付家老で糸魚川２万石信宗の直系。忠輝の改易後千２00石で再出発。
松平丹後守家（桜井１万石）明治元年～同年⑩信敏＝松崎村など旧請西藩領。滝脇家。綱吉から小島１万石を与えられた信孝の子孫。徳川宗家の静岡移封の代地だが３か月ほどで替え地、鶴舞井上藩領に。
松平筑後守家（旗本７千石）天保11年～慶応４年⑤正名、正孝＝西広、上高根、五井村。大河内家。大多喜松平藩の分家。正久の３男正佐が２千石を分知、家慶に近侍した正名が加増され７千石に。
松平出羽守家（姉ケ崎２万石）元和５年～寛永元年①直政＝姉ケ崎、海保、島野、神代村。秀康の３男で忠直の弟。姉ケ崎のあと大野５万石、松本７万石をへて松江18万石に定着。
松平大和守家（川越、前橋15万石）明和４年～５年、慶応３年～４年⑤朝矩、直恒、⑪直克＝松平越前系家門。秀康６男直基の５代朝矩が前橋転封のとき所領、幕末、直克も所領の一部を移す。
松下善一郎家（旗本５00石→９00石）慶長10年～文政９年①之勝、之綱、之直、綱達、之綱、之賀、綱紀、綱貞＝今富村。若き日の豊臣秀吉が奉公した松下氏の一族。之勝が家康に仕え、之長が加増。
松本兵庫頭家（旗本５00石→１50石）安永８年～慶応４年④秀持、式毅、毅実、勝次郎＝八幡、海保村。御家人１00俵に生まれた秀持が田沼意次に才能を認められて勘定奉行５00石に。意次の失脚で加増分召しあげ逼塞。毅実は異国船渡来見分、ロシア渡来応接、勘定奉行格に。

兵衛、三右衛門、栄橘＝滝の口村。後北条旧臣。忠長につけられ廃絶後家光に戻された。
塚原彦兵衛家（旗本千９50石）寛永20年～万治元年②昌信＝山口村。甲斐の武田一族。正重が家康にしたがい、昌信が家光の養女鶴姫に付けられて加増。しかし子孫は幕府の養子政策違反で廃絶。
塚原三左衛門家（旗本４50石）万治元年～慶応４年①昌森、庄左衛門、昌親、昌博、昌勝、昌平、采女、寛十郎＝山口村。彦兵衛家から分知。幕末に嫡子昌義が慶喜にしたがって活躍。千石高で若年寄並、外国総奉行などを歴任。鳥羽伏見の戦いは幕府軍副将で出陣するが敗戦、責任を追求され逼塞、失脚。
土屋民部少輔家（久留里２万石）慶長７年～延宝７年①忠直、利直、頼直＝本郷、田淵、月崎、小佐貫、徳氏、飯給、不入、柿木台、大久保、大和田、岡本、平野、宮原、万田野、大戸、日竹、折津、北崎、加茂、石塚、菅野、山崎、芋原、根向村。武田氏の旧臣。忠直が家康に見出され秀忠に付属、栄進して久留里２万石、市原の15％を所領。頼直のとき藩を二分する御家騒動の末改易。子孫は旗本で再興。
土屋刑部家（旗本２千石）延宝３年～７年①喬直＝市原郡のうち。民部少輔家分家。宗家に連座改易。
筒井織部家（旗本千２00石→２千２00石→２千７00石）寛文元年ころ～慶応４年③正信、政勝、政明、政虎、政悦、正あきら、政憲、正盾、武左衛門＝押沼、下野、中野、海保村。大和筒井氏の一族。順斉が家康の妹橘姫を妻とし、政憲は江戸町奉行、下田表御用。日露和親条約で北方領土を日本固有の領土に。
坪内玄蕃家（旗本３千４00石）天正18年～慶長５年①利貞＝山口村。代々織田家に仕え、滅亡後家康の江戸入府にしたがった。関が原の戦いは井伊直政の鉄砲隊を指揮して最大６千５30石に。
豊島作十郎家（旗本２00石→３00石）正保元年～慶応４年②忠松、忠勝、泰亮、泰久、泰定、泰郷、泰止、市喜之丞＝下矢田村。太田道灌に滅ぼされた豊島氏の一族。北条、武田、徳川と代わる。代々大番組。
徳川清水宮内卿家（三卿10万石）宝暦12年～寛政７年、文政６年～安政元年①重好、敦之助、斉順、斉明、斉かつ＝宮原、惣社、神代、馬立、今津朝山、不入、池和田、勝間、下矢田、山小川村。重好は吉宗２男。家重が病身のため将軍予備血統として三卿に。敦之助の早世で途切れるが家斉の子をつなぐ。
徳川宗家（将軍家）天正18年～慶応４年①家康、秀忠、家光、家綱、綱吉、家宣、家継、吉宗、家重、家治、家斉、家慶、家定、家茂、慶喜＝市原郡内各村、代官所支配。三河松平の出。家康は織田、今川２大強国に挟まれた松平広忠の長男。織田信長、豊臣秀吉に臣下の礼を取り、天正18年小田原北条征伐で江戸城関東６か国２50万石に。秀吉が死ぬと関が原の合戦で反対勢力を一掃、慶長８年に江戸幕府を開いた。市原には天領とも呼ばれた将軍直轄領が多く、勘定奉行配下の代官が支配した。
戸田又兵衛家（旗本８00石？）天正19年～慶長はじめ①直頼＝高倉、番場、永吉村。家康の関東入府にしたがって８00石。子孫は分散、７家が明治維新へ。
戸田惣左衛門家（旗本５40石）慶長はじめ～慶応４年①直長、直良、直寿、直澄、直方、直常、直興、又兵衛、金三郎、史、復太郎＝高倉、番場、永吉村。又兵衛家の分家。大番組頭、道中奉行など。
富永喜左衛門家（旗本７00石）寛永10年～寛文元年①正義＝宗角、菊間村。北条氏旧臣で家康に仕える。
富永彦兵衛家（旗本２50石）寛文元年～慶応４年①正寛、寛房、守善、寛高、良満、正英、啓太郎、てん之助＝宗角、菊間村。喜左衛門家から分知。正寛が蔵奉行、腰物奉行に。
富永甚四郎家（旗本３00石→５30石）慶長２年～慶応４年②直則、勝由、政茂、勝浄、高則、高忠、彦四郎、斧太郎＝山田村。北条氏の旧臣。家康に仕え、代々両番格を。
内藤石見守家（大阪定番１万５千石）寛永10年～慶安２年①信広＝金剛地村。盛岡内藤家の一族。長浜４万石信成の２男。大坂の陣に出陣、大阪城代となるが部下の管理不良で８千石に降格。
内藤八之丞家（旗本千石）慶安３年～慶応４年①信通、信久、信常、信治、信安、信就、信幅、主計、信復＝金剛地村。岩見守家から分知。代々小姓組が多く、信復は使番、軍目付を。
内藤大和守家（高遠３万３千石）延宝８年～元禄４年⑤重頼、清枚＝本郷、小佐貫、宮原、加茂、飯給、平野、万田野、大戸、大和田村。三河以来の譜代旗本。清成が勝山３万石。重頼は父の早死にで一時５千石に降格するが綱吉の信任をえて高遠城主に復帰。
永井勘九郎家（旗本３00石）宝永９年～正保元年①吉勝＝榧狭、佐瀬村。関が原、大坂の戦功で独立。
永井勘兵衛家（旗本３00石→４00石）正保元年～慶応４年①信勝、信安、安敬、信秀、信宣、鎌五郎、勘兵衛＝榧狭、佐瀬村。勘九郎家分家。代々大番、新番、納戸番を。
永井（長田）平右衛門家（旗本石高未詳）天正18年～文禄２年①重元＝荻作、小田部村。代々松平家に仕え大浜郷領主。関東入府で市原に。
永井右近太夫家（古河７万２千石）天正18年～寛永10年①直勝、尚政＝奥野、真ケ谷、島田、水沢、真福寺、八幡、海士、新堀、大馬屋、福増、武士、有木、荻作、小田部村。直勝は平右衛門家重元の長男。家康に近侍して永井を名乗る。関東入府で５千石をえ、関が原、大坂などで累進、古河７万石に。
永井信濃守家（閏井戸２万４千石）元和５年～寛永３年②尚政＝閏井戸、山倉村。前出尚政と同人。秀忠の近習から老中、父とは別に閏井戸藩、陣屋を。父遺領を併せ古河８万９千石に。
永井豊前守家（旗本４千３00石→３千４00石）寛永３年～慶応４年①直貞、直孟、直澄、直朝、直賢、直富、直観、けい次郎、鉄弥、直景＝奥野、真ケ谷、島田、水沢、真福寺、海士、新堀、閏井戸、大馬屋、福増、八幡、有木、武士、古市場村。右近太夫家直勝３男から。２度の分知で３千４00石に。
永井主税家（旗本５00石）延宝３年～慶応４年①直方、直兼、直著、直定、直休、興之助、竜之助＝新堀村。豊前守家分家。直孟の２男から。
永田勝左衛門家（旗本２千石～千５00石）寛永10年～慶応４年①重真、直俊、直満、重恒、直恒、恒喬、直好、直道、久次郎、勝左衛門＝菊間村。３千５00石久琢の２男。分知に戦功を加え２千石を。
中根壱岐守家（旗本４千石）元禄ころ～宝永７年③正冬、正宴、正美＝平蔵村。正盛が家光の国目付け５千石、隠密組織を使って諸大名を監視。正美のとき植村千吉事件検視が軽率として減封。

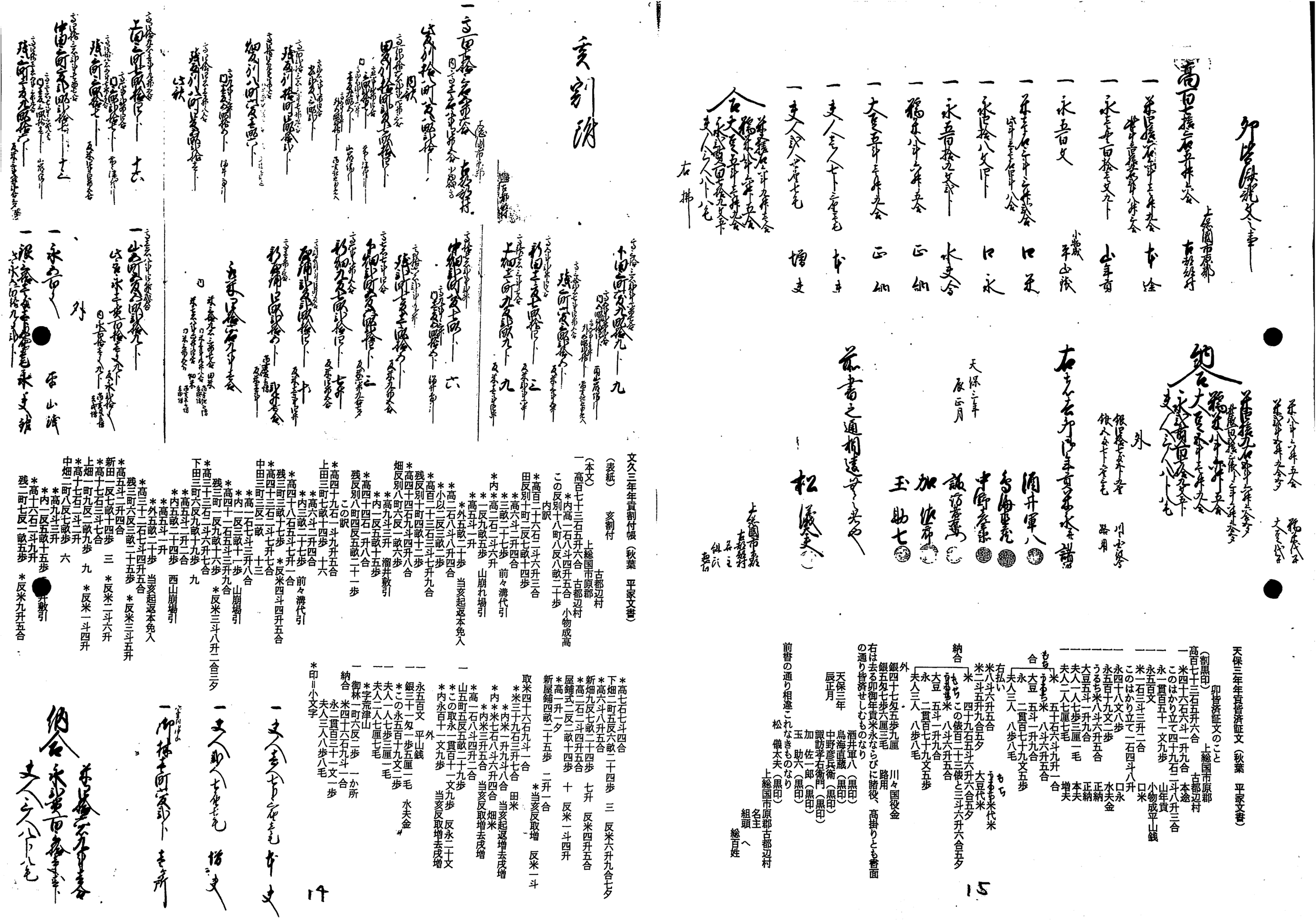
丸毛五郎兵衛家（旗本７50石）宝永元年～文政10年②利雄、利広、利徳、利恭＝椎津村。秀忠に仕えた利久の４00石が３つに分かれる。２男利明が２00石をえ、利雄が７50石に。
三島清左衛門家（旗本５00石→千３00石）寛永９年～慶応４年②政吉、政識、政興、政栄、政申、政春、政先、政堅、政養、政明＝相川、櫃狭、白塚村。政次が江戸入りにしたがい、政吉が５00石、養女小山が綱吉の乳母となり千５00石に加増。代々両番格。政養が幕末、維新期の「三島政養日記」を残す。
水野壱岐守家（北条１万２千石→鶴牧１万５千石）享保８年～明治４年③忠定、忠見、忠てる、忠実、忠順＝椎津、天羽新田、姉ケ崎、今富、君塚、廿五里、岩崎新田、五井、山倉、小谷田村。沼津菊間水野藩の分家。忠清の４男忠増も家綱の小姓を勤めて独立。忠位が側衆から大坂定番で１万２千石に進み、忠てるが家斉の側近として活躍、１万５千石若年寄で居所を姉ケ崎の椎津に移す。
水野市正家（旗本２千石→３千石）天正19年～慶応４年①義保、忠保、忠次、忠清、忠欽、忠福、忠郷、忠良、忠篤、忠敬＝新巻村。家康生母大の弟２男から。忠和のとき３千石が確定。
水野石見守家（旗本６千石→６千７00石）宝永４年～慶応４年③忠顕、忠常、忠英、政勝、貞利、貞篤、貞尚＝八幡村。大の姉の子長勝から。関東入りにしたがい、忠貞のとき５千石、忠顕６千石、貞利が家斉の側衆で６千７00石に。
水野羽後守家（菊間５万４千石）慶応４年～明治４年⑮忠敬＝省略、八幡周辺２万３千石。結城水野藩の分家。忠清が秀忠のもと松本７万石。一時改易となるが功績の家柄として再興。明治維新のとき徳川宗家の静岡転封にともなって玉突きで市原へ。菊間に城郭建設を進めるが工事半ばで終わる。
水野美濃守家（旗本８千石）天保５年～12年④忠篤＝万田野、村上、玉崎新田、天王河原、松ケ島村。新宮水野藩分家。藩祖２男の２男から始まる。千６00石旗本に生まれた忠篤は家斉の最側近として権勢、８千石をえるが天保の改革で千５00石にダウン。
水野若狭守家（旗本２千石→千２00石）寛永11年～慶応４年①勝忠、勝岑、勝隆、忠寄、忠通、忠一、敬太郎、要人＝妙香、牛久、上原、山田久保、矢田、田尾、皆吉村。結城水野藩の分家。勝成の６男勝忠が２千石をえ、分知を重ねて千２00石に。
水野善右衛門家（旗本３00石）元禄６年～慶応４年①勝ひろ、勝尹、勝親、勝興、健三郎、清三郎、増次郎＝田尾村。若狭守家から３00石を分知。
水野備前守家（旗本千５00石）寛文６年～慶応４年①勝直、勝彦、勝澄、勝羨、勝善、勝紀、延四郎、鎧太郎＝皆吉、大和田、加茂村。若狭守家勝忠２男が５00石を分知、江戸町奉行で伸ばす。
水野主税家（旗本５00石）宝永２年～慶応４年①勝英、勝美、勝順、健次郎、金之助＝皆吉村。同分家。
御手洗五郎兵衛家（旗本５00石）元禄14年～慶応４年④正近、正矩、正良、正武、正輝、信七郎、幹一郎＝米原村。武田氏の旧臣。家康に吸収されて３00石、正近が綱吉の先鉄砲頭で加増。
宮城三右衛門家（旗本４千石）慶安ころ～寛文５年②和治＝大厩村。陸奥の名家。豊臣秀吉から家康に仕えた和甫が大目付で４千石に。
宮城忠左衛門家（旗本５00石）寛文５年～慶応４年①和直、和道、和通、和寛、源太郎＝大厩村。三右衛門分家。和治の２男和直が５00石を分知。
三宅半七郎家（旗本千石→千５20石）元和元年～元禄８年③重勝、重吉、重貞、重房、重次＝大坪、浅井小向村。挙母三宅家藩祖康貞の叔父から。和直が家康に仕え、重勝と重吉が加増。
宮崎備前守家（旗本３千５00石）元和元年～慶応４年②時重、重政、時常、重供＝磯ケ谷、不入斗、島野村。武田氏旧臣、滅亡後家康に与し、時重が家光、家綱に仕えて３千５00石に。
三好石見守家（旗本２千石）慶安３年～慶応４年②政盛、勝政、政敬、善政、政幹、有政、政徳、成政、大助＝国吉、馬立、皆吉、萱橋、金沢、大蔵村。戦国大名浅井氏の一族。大坂落城のとき千姫にしたがって脱出した母子が血縁の秀忠夫妻に仕えて２千石。代々小姓組などに。
村上三右衛門家（旗本千２00石）宝永４年～慶応４年③正春、正清、正親、八十郎、次郎左衛門、三十郎＝八幡村。旧小早川秀秋の重臣。関が原の合戦で徳川方内応の功績で２千石、分知で千２00石に。
森弥左衛門家（旗本５00石）宝永元年～慶応４年①定尚、定政、定利、定賢、定救、定前、重右衛門、信八郎＝国吉、閏井戸、五所村。小田原北条氏に仕え、滅亡後秀忠の旗本に。
保田越前守家（旗本４千５00石）元禄13年～享保８年③宗郷、宗恒、清房＝閏井戸村。紀伊の名家、家康にしたがい宗郷が４千５00石に伸ばすが無嗣廃絶。
柳沢吉保（定府６万２千石）元禄元年～７年②吉保＝閏井戸村。綱吉の小姓から大老格、甲府15万石に進んだ江戸最盛期の代表的旗本。生類哀れみの令を進めたが経済政策での功績も大きかった。
山下信濃守家（旗本千７00石）天和２年～慶応４年②昌勝、勝季、勝行、勝延、勝彦、勝英、市郎右衛門、式部＝大桶、柏原村。木曽義仲の後胤という。代々松平、徳川家に仕えて千７00石に。
山本六右衛門家（旗本千50石）邑次、邑政、邑綱、邑旨、邑貞、邑良、六右衛門、平六郎＝久保、藪村。はじめ織田家に仕え、江戸入府にしたがう。
吉川一学家（旗本千１00石）天保14年～慶応４年⑤従縄、次郎左衛門＝古敷谷、小谷田村。紀伊家から吉宗にしたがい、従弼が清水家家老で千１00石に。
吉田助之丞家（旗本石高不詳）天保ころ。某＝中高根村。寛政譜などになく未詳。
渡辺筑後守家（旗本３千石）慶長３年～延宝４年①勝、正＝豊成村。渡辺綱の末裔。千姫に付属して３千石に。
渡辺半左衛門家（旗本３00石）延宝８年～慶応４年①貞、慶、元、通、功、半左衛門、仙司、半左衛門＝豊成村。筑後守家から分知。



古都邊村明細差上帳

薗領主
林昌之助領分
古都邊村

本新田畑
一高百七拾三石五升六合
但し本新田畑屋敷小物成高共
此反別拾八町八反八畝廿歩
貳反三畝貳歩　田方溝代山崩場年々引
壹反五畝拾五歩　畑方溜井敷二年々引
小以三反八畝拾五歩（朱書「七」）
殘高百六拾九石貳斗四升貳合
此反別拾八町五反五歩（朱書「三」）
内
（反別拾町四畝拾貳歩　田方
反別八町四反五畝廿壹歩　畑方
此譯
一上田三町三畝拾七歩　字海田　字下田　字島越
反四斗四升五合取
一中田三町壹反九畝拾六歩　字下田　字とりこへ　字わたと　字はと　字新砂　字大谷　字とらこ谷　字海田　字石谷田　字瀧谷田
反三斗八升貳合三勺取
一下田三町六反三畝貳拾五歩　字海屋　字小屋　字新田　字とふはつ　字こ山　字ねたこさね
反三斗五升取
一新田壹反七畝拾四歩　字新田　字そしか谷　字大荻山　字ねこさね
反貳斗六升
一上畑壹町九反貳畝九歩　字居　字わた　字下　字さく　字とりこへ
反壹斗四升取
一中畑貳町七反壹畝拾五歩　字とりこへ　字わた下　字居　字ほらた　字山ノ　字さく　字たきやつ
反九升五合取
一下畑貳町五反六畝貳拾四歩　字さく　字山ノ　字たつ　字砂ろつ　字とりこ畑　字かる作瀧竹瀧
反六升九合七勺取
七升四合五勺取
一新畑九反七畝貳拾四歩　字かる瀧　字官ノ　字すま根　字居山　字とりこへ下　字山ノ　字かいとり
反四升五合取
一屋敷貳反貳畝拾四歩　字苗代谷　字向ノ　字屋敷　字たきノ向　字とりこへ
反壹斗四升取
一新屋敷四畝貳拾五歩
反壹斗取
一見取場　無御座候、
一御厩御入用御上納物　無御座候、
一糒米八斗六升五合御上納來り申候、
此代米八斗六升五合宛　被下置候、
一菜種御上納之儀
一大豆五斗壹升九合御上納來り申候、
此代米貳斗五升九合五勺宛　被下置候、
一小豆　納來り候儀　無御座候、
一大麥　納來り候儀　無御座候、
一小麥　納來り候儀　無御座候、
（朱書「無高」）古都邊神社日精大神は神号相改申候、
一無高　山王宮　梁間貳間三尺　神主　無御座候、
桁行五間
一御林反別壹町六反貳歩　字前津山　壹ケ所
（朱書「右去壬申年御掃下ニ相成申候、」）
一御高札場（朱書）　壹枚　似セ金銀禁之札　御座候、
但し村仲（中）ニ御座候、
一正月餅松竹其外納候もの　無御座候、
一國役掛り高百七拾三石五升六合
（朱書「百六十九石貳斗四升貳合」）
但し是迄川々御普請掛りニ御上納仕候、
一千石夫金　納來り候儀　無御座候、
一潤井戸村え定助相勤來り申候、
一御林下草代米永共納來り候儀　無御座候、
一夏成金、秋成金、冬成金　無御座候、
（朱書「林成」）尤山永小物成永共十月皆済之砌御上納仕候、
一俵〆四斗二て切上　米五拾石九斗九升九合四勺斗立、延口米共此俵百廿七俵壹斗九升九合四勺
名主　壹人
組頭　貳人
百姓代　壹人
一百姓家貳拾壹軒　内村役人
一水呑民家　無御座候、
一惣人數　百拾九人　内　男　五拾三人　女　六拾六人
右取調率差上候通り相違無御座候、以上、
明治二巳年三月日
古都邊村
百姓代　治郎左衛門（印）
組頭　助太郎（印）
同　勝治郎（印）
名主　利兵衛（印）
郡御勘定　御役所



天保三年年貢皆済証文（秋葉　平家文書）

卯皆済証文のこと
（割黒印）　上総国市原郡
高百七十三石五升六合　古都辺村
一米四十六石六斗一升九合　本途
米四十六石六斗一升九合　このはかり立て四十九石二斗八升三合
一永一貫百五十一文九歩　小物成平山銭
永五百文　口米
米一石三斗三升二合
このはかり立て一石四斗八升
永四十八文八歩　口永
永五百十九文二歩　水夫金
うるち米八斗六升五合　正納
大豆五斗一升九合　正納
夫人一人七歩三厘一毛　本夫
夫人二人七厘七毛　増夫
もち　うるち米　五十石六斗九升一合
合　大豆　五斗一升九合
永　夫人三人　二貫百七十九文五歩
八歩八毛
右払い
米八斗六升五合
米二斗五升九合五夕　もち　うるち米代米
米　大豆代米
四十九石五斗六升六合五夕
納合　もち　うるち米　八斗六升五合　この俵百二十三俵と三斗六升六合五夕
大豆　五斗一升九合
永　夫人三人　二貫百七十九文五歩
八歩八毛
外
銀四十七匁五歩九厘　川々国役金
銀五匁七歩六厘三毛　路用
右は去る卯御年貢米永ならびに賄役、高掛りとも書面
の通り皆済せしむものなり　酒井軍八（黒印）
天保三年　鳥海直蔵（黒印）
辰正月　中野彦兵衛（黒印）
諏訪孝右衛門（黒印）
加佐一郎（黒印）
玉助六（黒印）
前書の通り相違これなきものなり
松儀太夫（黒印）
上総国市原郡古都辺村
名主
組頭へ
総百姓

15

天保三年
辰正月

右之通相違無之者也

松儀太夫

上総国市原郡
古都辺村
名主
組頭
百姓

外

一銀弐匁七歩六厘三毛　酒井軍八
一永五百文　小物成平山銭
一永壱貫百五十一文九歩　山年貢
一米壱石三斗三升二合　口米
一永四十八文八歩　口永
一永壱貫百五十一文九歩　水夫金
一米四十六石六斗一升九合　口米
一永壱貫百五十一文九歩　山年貢
一米壱石三斗三升二合　口米
一永四十八文八歩　口永
一永壱貫百五十一文九歩　水夫金
一稲米八斗六升五合　正納
一大豆五斗一升九合　正納
一夫人一人七歩三厘一毛　本夫
一夫人二人七厘七毛　増夫

右払

一夫人三人八歩八毛　増夫

合
稲米八斗六升五合
大豆五斗一升九合
夫人三人八歩八毛

文久三年年貢割付帳（秋葉　平家文書）

（表紙）　亥割付　古都辺村
（本文）　上総国市原郡
一高百七十三石五升六合　古都辺村
*内高一石八斗四升五合　小物成高
この反別十八町八反八畝二十歩
内訳
*高百二十六石二斗六升三合
田反別十町二反七畝十四歩
*高六斗二升四合
*三畝二十七歩　前々灌代引
*内*高二石二斗六升　*一反九畝五歩　山崩れ場引
*高五斗一升
*外五畝二十歩　当亥起返本免入
*高二石八斗八升四合
*小以二反三畝二歩
*高百二十三石三斗七升九合
残反別十町四畝十二歩
*高四十四石九斗四升八合
畑反別八町六反一畝六歩
*高九斗三升　溜井敷引
*内一反五畝十五歩
*高四十四石一升八合
残反別八町四反五畝二十一歩
この訳
*高四十九石一斗九升五合
上田三町七畝十四歩　十六
*高六斗二升四合
*内三畝二十七歩　前々灌代引
残三町八石五升七升一合
*高四十八石五斗七升一合
残三町三畝十七歩　*反米四斗四升五合
*高四十三石一斗七升七合
中田三町三反一畝　十三
*高一石七斗三升八合
*内一反三畝十一歩　山崩場引
*高四十一石五斗三升九合
残三町二反九畝十六歩　*反米三斗八升二合三夕
*高三十三石二斗六升七合
下田三町六反九畝十九歩　九
*高五斗二升二合
*内五畝二十四歩　西山崩場引
*高五斗一升
*外五畝二十歩　当亥起返本免入
残三町六反三畝二十五歩　*反米三斗五升
*高五斗二升四合
新田一反七畝十四歩　三　*反米二斗六升
*高十七石三斗七合
上畑一町九反二畝九歩　九　*反米一斗四升
*高十七石二斗二升
中畑二町八反七畝歩　六
*高九斗三升
*内一反五畝十五歩
*高十六石二斗九升
残二町七反一畝五歩　*反米九升五合
*高七石七斗四合
下畑二町五反六畝二十四歩　三　反米六升九合七夕
*高六斗八升五合
新畑九反七畝二十四歩　七升　反米四升五合
*高二石二斗四升五合
屋鋪式二反二畝十四歩　十　反米一斗四升
*高一升一夕
新屋鋪四畝二十五歩　二升一合
*当亥反取増　反米一斗
取米四十六石九斗一合
*米三十九石三升七合　田米
*内*米一升九斗八合　当亥起返増去戌増
*内*米七石八斗六升四合　畑米
*内米三升五合　当亥反取増去戌増
*高一石八斗四升二合
山五町五反五畝二十九歩
*この取永一貫百十一文九歩　反永二十文
*内永百十一文九歩　当亥反取増去戌増
外
永五百文　平山銭
一銀三十一匁一歩五厘一毛　水夫金
*この永五百十九文二歩
夫人一人七歩三厘一毛
夫人二人七厘七毛
*字荒津山
一御林一町六反二歩　一か所
納合　米四十六石九斗一合
永二貫百三十一文一歩
夫人三人八歩八毛
*印＝小文字

14

一丈　*高七石七斗四合　*反米九升五合

一丈　*高六斗八升五合　*反米四升五合

一丈　*高二石二斗六升三合　*反米一斗三升三合

納合　米四十六石九斗一合　永二貫百三十一文一歩　夫人三人八歩八毛

の忠霊塔付近）の数千坪にわたる藩庁建設は、土地の造成と土台をまわした段階で、明治四年（一八七一）廃藩置県を迎えて中断された。藩庁あとには水野忠敬の碑が建ち、名残を留めている。

これより先、鐘楼を備えた宏大な御殿と、二階建ての医局が建設され、時を告げる鐘の音は、水野家のご威光を村内に響かせていた。前者は廃藩置県で木更津県の管理に移り、後者は菊間村役場として使われた。木更津県は千葉県となって、新政府の中央集権化はさらに進み、水野忠敬は東京在住を命ぜられた。

当初は藩そのものの移転を考えていた菊間藩では、一時は藩士の戸数が菊間のほか、大厩、山木、草刈などにまたがって六四四戸となり、人口も数千人に増えた。

市原周辺には大きな城下町がなかったので将来の繁栄を見込んで、旅篭や寿司屋、そば屋や銭湯までできて賑わった。しかしその繁栄も二年間で、秩禄を失なった旧藩士は土地を開拓して茶の栽培をしたりしたが、時の流れとともに居住地を離ればらばらになっていった。沼津を出る時は家を解体したが、菊間では藩が解体され、藩士たちは暮らしの中核を失った。城下町の夢は消えた。バブルがはじけ商人たちはあてが狂った。

当初計画されていた陣屋は、戦闘を想定した作りで、村田川と菊間台地の地形を巧みに利用した防禦の構えだったといわれる。しかし時の流れには抗しがたく、建物は藩庁作り中心に進められたが、藩士の気持ちは藩がこれまで通り機能するのか、変わるとすれば時流はどちらへ赴くのか、大きなとまどいがあったにちがいない。

かてて加えて藩士たちが移り住んだ房総の地は、戊辰戦争で敗れた旧幕臣や各藩の脱走者が逃げて隠れていたところであり、最初に市原にやってきた沼津藩士たちには、不安があったにちがいない。その藩士たちが住んでいた武家屋敷や長屋が、菊間の徳永台に長く残っていた。その長屋に住んでいたと親から伝え聞く子孫たちがいまでもいる。

一方沼津藩には、明親館という藩校があり菊間藩になっても、その名前を継承して武術と学問を教えていたが、明治五年（一八七二）学制が発布され、菊間小学校となった。先生はすべて旧菊間藩の藩士だった。中には私塾を開いた人もあり、その建物跡が今も山木に残っている。フタマタ学校（漢字は分からない）といった。授業料はただで、侍のボランティア活動だった。

水野家は明治十一年（一八七八）、資本金九万五千円で八幡銀行を設立した。水野忠敬頭取印の五円紙幣が残っている。変遷を経て北陸銀行になったと銀行史には書いてある。水野忠敬は歌人としても有名である。文の人でもあった。

忠敬は日露戦争が始まった三年後の明治四十年（一九〇七）に五十七歳で他界した。水野家の墓所は、家康の生母於大の方の眠る東京小石川の伝通院である。

忠敬は生前、菊間に帰ることもあり、小学校の全校生徒が出迎えた。当時は貴重品だった雑記帳をみんなにくれた。殿様の旧宅は宏壮で掛軸やらなんやら、色々なものがあり、風俗画を見に連れて行ってもらったという人もいた。開放的な雰囲気だったようだ。

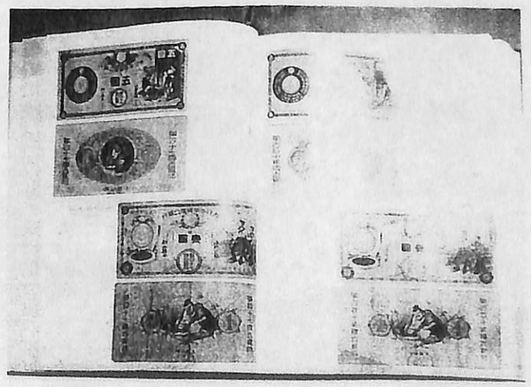
殿様の子供は東京に居住したが、太平洋戦争中には菊間に疎開してきた。殿様の孫の忠和氏と仲よしだったという人も地元にいる。戦後家族は東京に引き上げたが、同窓会には出てくれないと、小学校時代の写真を見せながら、その同級生は私に話した。

写真は祖父の殿様とよく似ている。祖父、孫とも最後の将軍、徳川慶喜と同じく、下顎部の発達した殿様顔である。血筋は争えないものである。

藩士の子孫も数多く、地元に残っている。沼津から菊間に至るまでの生活記録を、丹念に記した岡田程八氏の子孫も、菊間に暮らしている。その筆書きの日記は、くずした字で書いてあって、とても私には読めないが、菊間藩研究者には欠かせない資料である。その原本は、岡田程八氏の子孫が保存している。また沼津市の教育委員会では、岡田日記の現代字訳をもっていると聞いている。

菊間ばかりではない。八幡にも菊間藩士の子孫は広く散在している。長い間、大河内病院を開業していたお医者さんもその一人で、菊間藩の家老の子孫である。

その子息が大河内一雄さんで、旧制千葉中学校を出たあと武蔵高等学校に入学し、東京大学医学部を卒業し、現在九州大学の名誉教授である。血液学の権威だと聞いている。奥さんはドイツ人である。もと



八幡銀行のお札

もと沼津藩が菊間に移ったのも、国際化の波が江戸に打ち寄せ、はね返って沼津、八幡へと寄せてきたのだから、文化や人間の国際化現象も、むべなるかなである。

話は前後するが、前記藩校明親館には明治大正期の工業教育に大きく貢献した手島精一氏が学んでいる。手島氏は欧米に留学後、文部省に勤務、今の東京工業大学の設立に力を尽くした。その教育理念は虚学を排して実学を重視し、今日の科学技術教育の先鞭をつけている。その伝統は菊間藩の明親館にも生かされ、たとえば数学なら日常生活に役立つ勉強を、また筆学なら相手と意思疎通のできる文章を書けるようにとの教えだったということである。いずれにせよ、教育を重視する藩風であったことは事実である。だからこそ開校当初の菊間小学校の先生が、全部菊間藩士であったり、私塾を開く藩士がいたのである。藩の命は短かったが、いやそれなるが故に、後世の人間を育てる教育への情熱は、すさまじかったような気がするのである。

教育だけではない。広く社会に貢献した菊間藩士の子孫は実に多い。一例をのべたい。

江戸詰の菊間藩士に、山田錆太郎という人がいた。娘の一人が八幡の山口家に嫁したが小学校の先生だった主人は、不幸にして早世した。自分も小学校の先生だったが、辞めていたため復職できず、奮起して勉強し助産婦の資格を得た。山口喜久枝さんという。

その人は今年の七月、天寿を全うして、百歳で亡くなった。一世紀を生きた。生まれたのが一九〇一年、亡くなったのが二〇〇一年である。長年の功績が認められ、勲六等宝冠章をいただいている。

その子息洋一氏は、祖父から伝わる名刀、和泉守国貞をもっている。長さが七十一センチで、反りが一・八センチの業物である。もう一本、婦人用の短刀ももっている。小柄を差すところに、銀の箸がある。毒味用のもので、毒があると色が変わるのだそうだ。にわかに江戸と武家の匂いがした。

話はそれだけではない。殿様の孫の忠和氏が、山口氏の家を訪れたことがある。水野家が菊間に疎開していた戦争中か戦争直後のころで、お互いがまだ少年の時である。八幡の飯香岡八幡宮のお祭りの時で、菊間在住の山口氏の母の姉が連れてきたのだという。お祭り見物とご馳走がお目当てだったらしい。「物が無い時代だったからね」と山口氏が言っていた。

その姉にあたる人も、この時代水野家の家族の面倒をずいぶん見たらしい。その山口洋一氏も今は、水野家所有だった土地を購入して住んでいる。そこに何となくかつての、主従の絆のようなものを感ずるが、今は旧菊間藩士の子孫の連携は、全くといってよいほど無いらしい。一部好事家が子孫の名簿を作成してもっている程度で、一般には特別のお付き合いは無いらしい。その意味では沼津からやってきた菊間藩も、その人たちも水のように地元にとけ込んだといってよい。

沼津藩を玉突きで菊間に寄越したのは、徳川崩壊だった。その瓦解をもたらしたものは海を渡ってきた外圧だった。その大波にもう一つ時代の波が重なり、合成波になった時、菊間藩はその波間に消えた。

いま菊間台地に残るものは、石碑と記念の棒杭である。だが目に見えぬ遺産は大きい。異文化との接触によって地元に貢献した。人材は地下水脈となって異境に滲みこみ、地域の文化を育み、社会の発展に大きく寄与したと私は信じている。

みずのただのり　水野忠敬

一八五一―一九〇七　菊間藩主。出羽守
忠誠の養子となり、一八六六（慶応二）年沼津藩五万石の家督を相続し、出羽守と称す。戊辰戦争のとき、駿府城防衛に参加したが、討幕軍進出後はこれに服し、甲府城代に任ぜられ、甲州地方の鎮定に尽す。その後、徳川家達が駿河・遠江・三河に封ぜられるや、同地にあった水野忠敬は、同年七月上総国菊間藩五万石に転封となる。廃藩置県後東京に移り、一八八五（明治一八）年子爵となる。九四（明治二七）年ごろからは宮内省に出仕していて、御歌所に参候していた。

菊間藩士の子孫　・山口洋一氏

それが激動の時代に生きて志を立て、命を捨てた人への鎮魂歌であり、縁あって藤田屋に泊まった人へのいささかの供養だと思うからである。

これまで書いたことは、生前父から聞いていたことが根っこにあり、それに資料を参考にしたものだが、読み進んでいるうちにいつか回りの景色が一変し、藤田屋の前の通りを町人や荷馬車が行き来し、資料に出てきた水野藩士の程田利貞とか岡田程八という侍が、私に「やあ、おまえさんが藤田屋の子孫かね」と声をかけてきた。幻想である。

旅篭、藤田屋がいつ店を閉じたか、はっきりしない。明治の終わりか、大正の始まりごろかと思われる。千葉県に東京から鉄道が通じ、小湊線もできると、物流の体系も変わって、船便が姿を消し、宿場町も変わったと思われる。旅篭の使命も終わり、お呼びでなくなったのである。そして戦後の経済成長を背景に、工業地帯の造成がはじまる昭和三十年ごろまで、ここ市原市八幡は静かな農漁村の幾星霜をへてきたのである。

その昔、ペリー来航に始まる外圧が国を変え、体制を変え、町を変えてさらに、個人の生活にまで影響した。太平洋を渡ってきた大波が江戸から沼津にうち寄せ、それがはね返って八幡にまで来たかと思えば、地球規模の歴史の面白さをそこに感ずるのである。

以上の話は父竹内真次が生前、発表したかったが機会を得ずできなかったものである。

このため私は、話を少々ふくらませて、広い視野から問題を眺めてみた。そこに父がしたくてしなかったこと、できなかったことを私が代わってした意味があるような気がするからである。

菊間藩

竹内克

静岡県にあった沼津藩が、徳川瓦解とともに千葉県市原市にやってきて、菊間藩となった。百三十年前のことである。

藩主の水野家は、徳川宗家とゆかりの深い譜代大名だけに、維新とともにいち早くリストラされ菊間に移封された。時の流れは速く中央集権樹立へと向かう本流の中で、菊間藩は泡沫のごとく消えてゆく。言ってしまえばそれだけのことだが、短命に終わった菊間藩に、時代に翻弄された一譜代の軌跡を辿ってみたい。

それではなにが徳川瓦解を招いたのか。内政の行き詰まりもさることながら、直接の原因は外圧、つまり市場開放を迫る外国の圧力だった。いまと同じである。その外圧が内圧に転化したとき、幕末の動乱となり太平の天下は、はじけて揺れた。

ペリー提督率いるアメリカ東インド艦隊の黒船四隻が、江戸湾浦賀沖に現われて日本の門戸を叩いたのが嘉永六年（一八五三）。この年、ロシアのプチャーチンも長崎に来航している。

翌年安政元年には、ペリー提督は再びやってきて、強腰で幕府に日米和親条約を調印させた。下田、函館の両港が開港し世界の新興資本主義国アメリカに、扉を開く端緒を作った。アメリカの砲艦外交にあわてふためいた幕府の周章狼狽は、それまで政治に関与しなかった天皇親政への期待となり、さらに雄藩（外様大藩）が政治の正面に躍り出て、幕藩体制のバランスが崩れていった。

次にアメリカが求めたものは、実質的な開放、つまり通商条約の締結である。大老井伊直弼はアメリカの巧妙にして、強引な力に押し切られ勅許を待たずして、安政五年（一八五八）日米修好通商条約に調印した。

大老の強権政治に反対する水戸、薩摩浪士に襲われ、一八六〇年直弼は暗殺された。万延元年三月三日の桜田門外の変である。

これにより幕府の権威は失墜し、尊皇攘夷の炎が燃えさかった。しかし外国の力の恐ろしさを知った雄藩は、看板を尊皇討幕へと変え、新時代の到来に備えた。そしてついに慶応三年（一八六七）十二月九日、王政復古の大号令が発せられ、二百六十五年続いた徳川政権は、十五代慶喜でその幕を閉じた。

むろん簡単な幕引きではなく、その後血で血を洗う内戦が続いたが、その間徳川恩顧の譜代藩が、あっさりと新政府側についていった事実を、菊間藩のことに入る前にまずのべておきたい。

さて沼津藩、水野家のことである。もともと沼津城は甲斐武田一族が、小田原北条氏の攻撃に備えて天正年間（四百年前）駿河の外れに築いたものだが、武田氏滅亡のあとは徳川家康の所有となった。

そして徳川一門が城主となって続き、いったんは廃城となったが、安永六年（一七七七）水野忠友が新しく城を作り、明治まで水野家が存続した。本丸、二の丸、三の丸、外濠があって、寛政（一七八九～一八〇〇）のころには、三万石の城下町は大いに賑わった。

この水野家は、家康の生母の於大の方の実家という名門の家柄であり、歴代藩主も老中職や老中首座の重職を勤めている。幕末維新三百藩総覧の沼津藩の項には、石高五万石、席次帝鑑の間詰（譜代城主級）家紋、丸に立沢瀉紋、最後の藩主、水野忠敬と書いてある。格式高き名家である。

その忠敬は、慶応二年（一八六六）十月家督を継いだが、四年正月には鳥羽伏見の戦いとなり、戊辰の内戦へと入っている。

忠敬は尾張名古屋藩、徳川慶勝の勧告を受けて、この年の二月にはいち早く新政府に恭順の意を示した。そして甲府城代を命ぜられたが、反政府軍の鎮定に手抜かりがあり五月には城代を罷免された。しかし老臣が責任をとり忠敬は赦された。徳川恩顧の譜代大名は次々と新政権に忠誠を誓ったが、沼津藩水野家も例外ではなかった。

内戦とは別に、内政も動き出した。最後の将軍慶喜は上野寛永寺に謹慎。徳川宗家には御三郷の一門、田安家から六歳の家達が後継ぎに入り、駿河府中藩（静岡）七十万石の成立となった。

これに伴い、駿河・遠江にいた七人の大名は国替えを命ぜられ、旧幕領が四十万石以上あった房総に玉突きで移封されてきた。その一人が菊間に来た水野忠敬五万石だった。実際には市原郡内では二万三千七百石で残りは安房の国の北を与えられた。慶応四年（一八六八）七月十三日、菊間村への移封が正式に決まり、八月三十日には沼津城を引き渡した。あわただしい旅立ちの支度である。新政府から転出費用として毎年現米千石、金一万五千両が三年間支給されることになり、これとは別に引っ越し代として一万三千両が下賜された。気高き鶴が一羽、菊間の原野に降り立つ感じである。

一方藩士たちは、城明け渡しによって近隣の村に分宿して、不自由な生活を余儀なくされたので、菊間の新天地に大いなる夢と期待を抱いたといわれる。慶応四年九月八日で、年号は明治に改まった。転宅は明治元年（一八六八）から五年まで波状的に行われている。なにぶんにも急な転勤命令であり、藩士たちは家を解体して海岸まで運び、舟に乗せて今の市原市八幡の浜本まで運搬し、積み替えたあと村田川をさかのぼって、菊間に至っている。

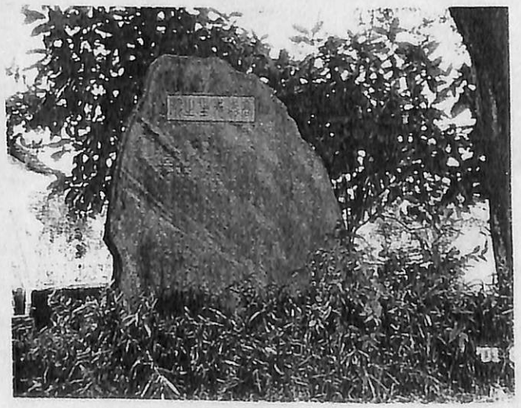
その尖兵となったのが、土地の測量や町割りの仕事にあたる先遣隊で、八幡宿の旅篭、藤田屋を仮陣屋とした。その藤田屋は私の家で今は壊してないが、古い家の間取りは覚えている。正面の真ん中に黒光りのする大黒柱があり、そこに木彫りの水野家の沢瀉紋がかけられていたと聞いている。

直径三十九センチ、厚さ七センチの重厚な家紋は、今も私の家に保存されており、裏に北という字が書いてある。沼津城本丸の北側に掲げられていたものといわれる。仮陣屋は後に菊間の千光院に移り、八幡観音町の称念寺を仮住居とした隠居水野忠寛は菊間徳永台に移った。

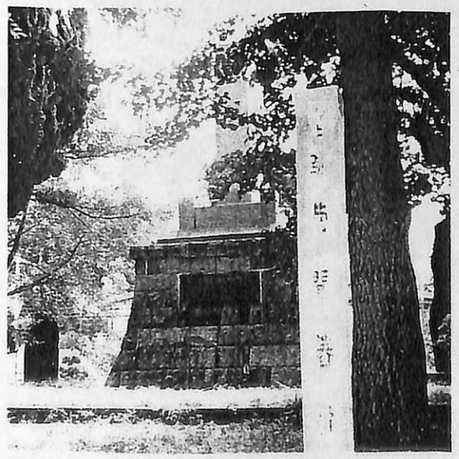
殿様の水野忠敬は一旦江戸屋敷に入り、そこから陸路市原郡に来ている。明治二年（一八六九）七月二十六日で、十八歳だった。すでに版籍奉還のあとで、新政府から菊間藩知事に任命されていた。

奉還後は新政府から禄高の一割を家禄として支給された。沼津をでる時は大名行列だった殿様も、菊間に着いたときはサラリーマン管理職の一地方行政長官になっていた。

こうした状況の変化から、当初計画していた菊間の字、雲の境（今



菊間藩の石碑



菊間藩庁跡の標柱・後ろは忠霊塔

千光院

菊間藩と藤田屋

竹内　克

駅の名前を見ると面白い。八幡宿と書いてある。八幡でもよさそうなものだが、宿という字がきちんとついている。

見なれてしまえば、別にどうということもないのだが、はじめての人にはいまの時代、不思議に思える駅名にちがいない。私の住む市原市八幡には昔は宿、つまり旅篭が多かったのである。

それはなぜかといえば、宿場町であったからだ。東京湾をはさんで江戸霊岸島との往来が盛んで、舟の発着する八幡には当然、旅篭も多かったわけだ。

私の家もその一軒だった。藤田屋という屋号である。その藤田屋にいまも、静岡県沼津市にあった水野藩五万一千石の木造りの大きな紋章が残っている。時代が慶応から明治に変わって、徳川譜代の大名が国替えになったとき、水野家は市原市菊間へと移された。そして菊間に本陣ができるまでの間、藤田屋が仮陣屋、いわば仮事務所だったのである。その所在を示すのが水野家の紋章、沢瀉紋（おもだかもん）である。直径三十九センチ、厚さ七センチの手にどっしりと重い木製の紋の裏には北という字が書いてあり、沼津城・本丸の北に面したところに掲げられていたものといわれている。

ではなぜ、沼津藩が菊間に来たのか。ことのおこりは、日本列島に烈震が走った嘉永六年（一八五三）ペリー提督率いるアメリカ東インド艦隊の黒船四隻が東京湾浦賀沖に姿を見せ、幕府に開港を迫ったことにさかのぼる。船に水と燃料を補給するため、国交を開きたいというのが言い分だ。

そのころの江戸の戯れ歌に「太平の眠りを覚ます上喜撰、たった四杯で夜も寝られず」というのがある。上喜撰とはそのころの銘茶の名前であり、ペリー提督率いる蒸気船にかけたものである。

いまでこそ市場開放がキーワードとなり、国際化の波が世界市場を突っ走っているが、いまから百五十年も前、開港を迫る強いアメリカの圧力を前に、幕府があわてふためいたことは想像に難くない。

そのあとの歴史展開は、皆様先刻ご存知の通りである。安政五年（一八五八）日米修好通商条約を結んだが、幕府の弱腰外交が天皇制への期待となって尊皇攘夷論に火が付いた。国内雄藩の思惑もあって、討幕派と公議政体派が激しく対立し、最終的には戊辰戦争という名の内戦となり、敗れた徳川幕府は政権を朝廷に返上し、慶応四年（一八六八）明治維新を迎える。

以上述べたことは、どの歴史書にも書いてあることだが、視点を少し広げれば西欧列強の外圧に対する対応は、国によって異なっていた。

中国の場合は、アヘン戦争でイギリスにあれほどこっぴどくやられておきながら、時の清朝は支配体制崩壊を恐れて近代化を怠った。

この点日本の場合、近代化の障害である幕藩体制を打倒し、文明開化と富国強兵への道を一挙に進んだ。清朝中国が反面教師だったのである。

それだけに外科手術の方法は素早く、そして荒かった。明治新政府は江戸に拠点を移したあと、いち早く旧幕府領を直轄とした。

私の手元に一冊の本がある。神谷次郎、祖田浩一共著の「幕末維新三百藩総覧」という本である。その中の菊間藩というページを開けると「慶応四年、駿河府中藩の成立によって、沼津藩水野忠敬（ただひろ）が五万石の半ばを収公されて、上総市原郡に移された」と簡単に書いてある。

これだけではよく分からない。少し詳しくいうと、新政府は徳川氏の相続人を徳川家達（いえさと）とし、駿府（静岡県）に封じて七十万石を与えた。

家達が駿河に入ったことにより、駿河、遠江二国の七人の大名は、ほかに国替えを命ぜられたが、房総地方には旧幕領が四十万石以上あったので、これら譜代諸侯はすべて房総へと移封されたのである。その一人が駿河国沼津藩から上総国市原郡（市原市）に移ってきた水野忠敬五万石である。つまり新政権のもと、リストラされた殿様が次から次へと職場を変えてきたと考えればわかりやすい。

さて菊間藩の話である。水野忠敬の菊間藩への移封が決まったのは、慶応四年（一八六八）七月のことだが、実際に入部したのは翌年の明治二年（一八六九）の七月二十六日といわれる。

その尖兵となって沼津藩士たちが次々とやってきて、新領地の見分やら配置の仕事にあたったわけだが、そのとき仮陣屋としたのが旅篭の藤田屋であり、当時正面の大黒柱に掛けたという木彫りの沢瀉紋（おもだかもん）が、わが家に残っている。

同じく八幡村の観音町称念寺は、隠居水野忠寛の仮住居だったが、後に菊間徳永台の御殿に移ったと記録に残っている。

いまは壊してないが、私の覚えている藤田屋の古い家は、旧道に面して一階が八畳四間、二階が八畳二間で、一階には更に小さい部屋が続いていた。確かにまん中に、黒光りのする三十センチ四方の大黒柱があり、ここに水野藩の紋が掛けられたものと見られる。裏には庭と離れの部屋があるが、水野藩の藩士たちはあるいはここにも、分宿していたのかも知れない。滞在した侍の数も分からないしどのようにいたのかも記録はない。

なにぶんにも急な移転命令なので、藩士たちは自分の家を解体して海路、沼津から八幡村浜本の港まで運び、そこからさらに村田川をさかのぼって輸送した。

地図を見ると沼津は伊豆半島の西側のつけねにあり、ここから船出して駿河湾、相模湾を伊豆半島沿いに走り、浦賀水道から東京湾に入って、房総半島に沿って北上して八幡に来たのであろう。

藩士の戸数は六四四戸で、住居地は菊間、大厩、山木、草刈などにまたがっていたといわれる。多分、先遣隊として藤田屋に陣取った藩士たちの仕事は、新しく建てる陣屋の計画とか、邸の割りふりだったと思われる。

しかし藩士何人が、いつからいつまで藤田屋にいたという記録は残っておらず、仮陣屋はやがて菊間の千光院に移り、ここを居所とした水野忠敬が、屋敷や藩庁の建設を始めることになる。

これまでなにもなかった農村地帯で、突如藩庁造りが始められ、武家屋敷が軒を連ねたのだから、人口増加に対応して寿司屋、そば屋、浴場までできて大賑わいになったという。いまでいう団地造成を考えれば、イメージが湧いてくるというものだ。

しかし、水野の菊間藩は明治四年（一八七一）の廃藩置県で菊間県となり、木更津県をへて千葉県となった。だから菊間藩は沼津から移ってきたものの、藩としては実際に機能せず、明治の中央政府に対する地方行政区にソフト・ランディングしてしまうのである。これまでのべてきたのは、菊間藩のいきさつであるが、不思議なのはなぜこの大事な藩の紋章を藤田屋に置いていったかである。平成五年に、沼津市が市制七十周年を迎えた際に、沼津市の教育委員会の方が私の家へこの紋章を借りに来たことがある。記念会場に展示したというから、大事なものであるにちがいない。

菊間藩については今年の秋、「歴史散歩」で現地見学会を予定していると聞いているので、それまでにさらに勉強しておきたい。菊間藩の仮陣屋だった藤田屋のことだが、このほかにも、幕末の歴史の中で別の経験もしている。

彰義隊の残党二人が江戸を逃れて、藤田屋に泊まっている。翌朝宿を出たところを、待ち受けた官軍に斬られて死んでいる。二人は多分、戊辰戦争の際、徳川に味方した木更津の請西藩の人である真武根陣屋に向かう途中だったと思われるが、二人が置いていった遺物が藤田屋に残っている。

これについては、市川、船橋戦争と戦いを進めて南下した房総の戊辰戦争として、いつか取り上げてみたいと思っている。

菊間藩・沢瀉紋（藤田屋所蔵）

旅篭藤田屋の見た幕末　　竹内　克

レジュメ　　8月11日

藤田屋は私の家の屋号　もともとは旅篭　私で6代目

１８００年代のはじめ文化文政のスタート

八幡宿の名前のとおり宿場町　　八幡と江戸を結ぶ五大力船の港町

旅篭藤田屋の経験した幕末三つのキーワード

1，戌辰戦争と藤田屋　2，菊間藩と藤田屋　3，リストラされた藤田屋

幕末の動乱は黒船来航で始まった　（年表参照）

幕府の権威傾く

尊皇攘夷から尊皇討幕へ

大政奉還　王政復古

新政府軍と旧幕府軍の戌辰戦争

鳥羽伏見の戦いから江戸開城へ

撤兵隊，房総へ徳川義軍府を置く

市川船橋戦争から五井姉崎戦争へ

撤兵隊敗戦　あるものは上野戦争に参加

藤田屋に二人の幕軍兵泊まる

新政府軍に斬殺される

形見の刀　粟田口国綱　長さ６９．６センチ　反り２．４センチ

殿様水野忠敬が沼津から菊間へ

御三郷の田安家から家達（いえさと）が徳川家を相続し，駿河府中藩７０万石を成立

駿河遠江の７人の大名が玉突きで房総へ

その一人が水野忠敬で菊間藩５万石を設置

藤田屋を仮陣屋に

いまも残る水野家の沢瀉（おもだか）紋　直径３９センチ　厚さ７センチ

版籍奉還で殿様から菊間藩知事に

鉄道の開通で宿場町変容

藤田屋も旅篭廃業

唐津藩の侍の子の（真金（まがね））が藤田屋へ婿入りして商売替え

藤田屋に残っているもの

　刀　水野家の紋　剣術の本　大黒柱を乗せた台石

年表

嘉永６年（１８５３）	ペリー浦賀に来航
安政５年（１８５８）	伊井直弼大老となる
	日米修好通商条約の無勅許調印
万延元年（１８６０）	桜田門外の変　３月３日
慶応３年（１８６７）	大政奉還
	王政復古の大号令
慶応４年（１８６８）	鳥羽伏見の戦い　１月３日
	江戸開城　４月１１日
	水野忠敬，菊間への移転決定　７月１３日
	沼津城引き渡し　８月３０日
	市川船橋戦争開　４月３日
	五井姉崎戦争開　４月７日
	上野戦争　５月１５日
	明治と改元　９月
明治２年（１８６９）	戌辰戦争終わる　５月
	版籍奉還
	水野忠敬菊間へ到着　７月２６日
明治４年（１８７１）	廃藩置県